

Title	ヤコブ伝と日本神話
Author(s)	井本, 英一
Citation	大阪外国語大学論集. 35 p.145-p.174
Issue Date	2007-03-09
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80017
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ヤコブ伝と日本神話

井 本 英 一

Jacob's Legend, and the Legend and Myth of Japan

IMOTO Eiichi

Isaac's wife Rebecca gave birth to twins after twenty years since their marriage. First, the older brother Esau appeared, then the younger brother Jacob appeared grasping his brother's heel. Emperor Keiko of Japan had twin sons. The younger brother tore off his brother's hands and feet. The young brother deprived his older brother of the right of inheritance because of their food.

Between the Jacob's legend of Genesis and the legend of Yamatotakeru, younger brother of twin sons of Emperor Keiko, there are many resemblances. It is doubtful whether Yamatotakeru was a real person or not. God delivered an oracle to Jacob, Abraham's grandson, while Amaterasu, ancestor of the Imperial Family of Japan delivered one to her grandson; both the oracles were originally the same, assuring their sovereignty will continue forever.

Jacob represents another hero of Japanese myth, Ninigi, Amaterasu's grandson. Jacob departed from his birthplace and visited his mother's brother. Jacob got married to his uncle's two daughters: the older was ugly, the younger pretty. Ninigi descended from heaven to earth and there he found two sisters, the older ugly, and the younger pretty. Those daughters were representations of death and life.

以下に『旧約聖書』の「創世記」に記録されたヤコブの伝記と日本神話の類同性を列挙し、それが集合的無意識の表徴による普遍的な神伝・伝説の一致というものではなく、一方から他方への伝播、あるいは失われた中心から両方への伝播と考えられることを提示したい。解釈の深化は後考に俟ちたい。

ヤコブと兄エサウは双生児であった。「創世記」にいう。アブラハムの子イサクはリベカと結婚したとき40歳であった。妻リベカはアラム人ラバンの妹であった。妻に子供ができなかったので、イサクは主に祈った。祈りは主に聞き入れられリベカは孕った。彼女の胎内では2人の子供が押し合っていた。主は彼女にいった。「2つの国民が汝の胎内に

宿っている。一つの民が他の民より強くなり、兄が弟に仕えるようになる」と。月が満ちて彼女は双子を生んだ。先に出てきた子は赤くて、全身が毛皮の衣服のようであったのでエサウと名付けた。そのあと弟が出てきたが、その手がエサウのかかと（アケブ）を掴んでいたのでヤコブと名付けた。リベカが2人を生んだとき、イサクは60歳であった（25. 19-26）。

双子は世界の神話・伝説において見られるモチーフで、これだけでは集合的無意識の表徴か伝播かを論断することはできない。以下では伝播した文化複合の1要素としての「創世記」と日本神話の類同性を論じる。景行天皇には双子の皇子がいた。兄はオホウスノ命、弟はヲウスノ命といった。父の景行はヲウスに「なぜ兄のオホウスは朝夕の食事に出てこないのか。兄の所へ行ってよく教えさとしなさい」といった。それでも兄は食事に出てこなかったので、天皇がヲウスに尋ねたところ、ヲウスは「兄のオホウスが夜明けに厠に入ったとき、待ちかまえて捕え、手足をもぎ取って薦に包んで投げ棄てました」と答えた。「創世記」では弟のヤコブは誕生のとき兄のかかとを掴んで出てきた。このモチーフは日本神話では弟による兄の殺害として表現される。

『日本書紀』によると、2人の御子が同じ日に1つの胞衣から双子として生まれたので、父の景行はこれを、いぶかって礁（からうす、踏みうす）に向かって叫び声を上げた。そこで2人の御子の名をオホウス（大礁）、ヲウス（小礁）と名づけた（景行天皇2年）。日本古典文学大系67『日本書紀』上の注にいう。伊豆三宅島では産婦が臼にとりつき出産する風習があった（栗田寛説）。栃木県足利市では難産のとき、妊婦の夫が臼を背負って家の周りを廻る風俗や、日高アイヌでは、お産が重いと産婦が臼に腹を押し当てる風俗や、子供を生んだ娘が初めて里帰りしたとき、その子を臼の中に入れる風俗があった（中山太郎説）。金関丈夫は、栗田寛、飯田武郷、中山太郎の節を挙げたあと、自説を述べる。それによると、景行天皇は皇后が分娩したとき背負っていた臼を下ろしてやれやれと汗を入れたとたんに、また1人生まれると聞いた。そこで天皇は臼に向かって「コンチクショウ」と叫んだ。（『考古と古代』「男のお産 景行天皇とウス」法政大学出版局、1982年、48-52頁。本書は『発掘から推理する』（朝日新聞社、1975年）と『胡人の匂ひ』（東都書籍、1943年）の合冊である。なお『発掘から推理する』は岩波書店から2006年に復刊されている）。景行天皇の叫び声は第1子出産のときに出されたのか、第2子のときに出されたのか不明である。景行の行為が世界に広く見られるクバード（男の出産）の1つであるなら、産婦が分娩のときに上げる絶叫を摸したものかも知れない。新生児は産声を上げる。これらの音声は、通過の際に聞かれる音声で、臨終の際の音声や除夜の鐘の音もこれに属する。まれびとのおとない、おとずれは境界における音の表象である。

「創世記」にいう。セム族の始祖アブラハムの許に主が現れ、1年のち妻サラは男の子を生むであろうと予言する（第18章）。主の予言したとおり、年老いたサラは孕り、アブラハムとの間に男の子を生んだ。息子はイサクと名付け、8日目に割礼を施した。イサクが生まれたとき、アブラハムは100歳であった。やがてイサクは乳離れした（第21章）。

このあと、神はアブラハムを試した。神はいった。「汝の愛する子イサクをわたしに供

犠せよ」と。翌朝、アブラハムは犠牲を焼く薪と2人の若者とイサクを連れて神の命じた所に向かった。途中でアブラハムは2人の若者とロバを残し、イサクに薪を背負わせて供儀の場所に歩いて行った。イサクは父に尋ねた、「お父さん、^{はんさい}燔祭に使う薪はここにありますが、焼く小羊はどこにいるのですか」。2人が神に命じられた場所に着くと、アブラハムは祭壇を基き、薪を並べ、イサクを縛って薪の上にのせた。アブラハムは刃物を取り息子を屠ろうとした。そのとき、天から主の使いの声が出て、「その子に手を下すな。主は汝が独り子である息子を主に捧げることを惜しまなかったことを嘉された」とあった。アブラハムが周りを見ると、1匹の牡羊が木の茂みの中にいたので、それを捕らえ息子の代わりに供儀した（第22章）。

イサクは人間アブラハムの子ではなく神の子であった。100歳に達せんとしていたアブラハムの老妻サラには受胎能力はなかった。神が彼女に来年出産するであろうと予告すると、彼女は自嘲する。しかし、サラは妊娠しイサクを出産する。シュメル時代から行われていた春分における神との聖婚と冬至における神の子誕生（小林登志子『シュメル—人類最古の文明』中公新書、2005年、聖婚儀礼、聖婚の項）の変異体である。カトリックでは3月25日の受胎告知日と12月25日の聖誕節（クリスマス）がこの伝統を継承している。

ヘロドトス『歴史』によると、春分に行われたと思われるバビロンのイシュタル女神（ヴィーナス）の社の祭りでは、多くの男性の参詣者とそれを待ち受ける女性の間で聖婚が行われた。この際、男性はそれぞれが男神を代表し、女性は女神を代表すると考えられた（1. 199）。40週の在胎のあと、冬至前後に神の子が生まれた。古代では女兒は聖娼となるべく養育された。男児は乳離れすると当該の女神の子として神殿で養育され、初物として男神に捧げられた。古代西アジアでも、初物は人間であれ動植物であれ、神の取り分であった。初物を供儀することによって、衰弱した神に活力を与えることができると考えられた。イサクが乳離れしたあと、初物として供儀されようとしたのは、異教の習慣が残存していたからである。

乳離れした幼児が薪を背負って供儀の場まで歩いてゆくのは不自然の観があるが、イエスが処刑場まで十字架を背負ってゆくのと同じ精神である。近現代の習慣では、銃殺刑に処せられた者の家族に銃弾の請求書が送られるのもこの流れであろう。あの世へ渡るのは自分で賄う約束があったらいい。のちに双子の父となったイサクが背中に薪を背負って歩いたという伝承が日本では双子の皇子の父が臼を背負って家の中を歩いたという話に変容したのであろう。イサクは景行天皇に反映された。景行天皇は崇神天皇の孫であり、垂仁天皇の子である。『記・紀』では崇神天皇はハツクニシラススメラミコトと呼ばれ、『日本書紀』では神武天皇はハツクニシラススメラミコトと呼ばれる。垂仁には2人の皇后がいた。最初の皇后は開化天皇の孫で、兄のサホヒコに命じられて垂仁天皇の暗殺を謀ったが、露顕して兄妹共に誅せられた。2番目の皇后はヒバスヒメで天皇との間に儲けたヤマトヒメは天照大神を伊勢の地に祭祀した。神武、崇神、垂仁3天皇はそれぞれ皇祖の特徴と名称を保有している。本来は皇祖は1人であったのが、事蹟が分散して伝えられたのであろう。

セム族の祖アブラハムには正妻サラがいた。サラにはアブラハムが99歳になるまで子になかったが、エジプト人の奴隷ハガルを夫に与えて息子イシュマエルを生ませた。サラが神の予告どおりにイサクを儲けると、ハガル親子は女主人サラの許から追放された。イサクは垂仁の皇子である景行、景行の母ヒバスヒメはサラに対応した。天照大神を伊勢に祭祀したヤマトヒメの対応は「創世記」には見られない。皇祖神天照大神は、もともと山の神や地母神と同類の女神で、皇女ヤマトヒメに祭られた。

一方、アブラハムの正妻サラ（サライ）のエジプト人奴隷ハガル（ハーガール）はイスラムでは、ハージャルと息子のイスマーイールとして伝承された。「創世記」にはその対応箇所はないが、追放された2人がメッカに到着すると喉が渴いたイスマーイールが泣き叫ぶので、母ハージャルはサファールとマルワの塚の間を何回も走り水を探した。息子のイスマーイールがその地を掘ると泉の水が湧き出した。親子はこの地に落ち着き、イスマーイールは父イブラーヒム（アブラーハム）とカアバ神殿を建設した。垂仁天皇の最初の皇后サホヒメとアブラハムの妾ハガルは対応関係にあるが、サホヒメ兄妹は誅せられて舞台から姿を消し、2番目の皇后ヒバスヒメの娘で景行天皇の妹のヤマトヒメが伊勢神宮を建てた。カアバ神殿の祭神はイスラム教になってからは男神アッラーフであるが、前イスラム時代の神殿には女神アッラトが祭られていた。「創世記」と日本神話に伝わった神話・伝説は、発信地においては始祖説話であったが、それぞれの民族と文化に適合して発展した。

メッカのカアバ神殿は『コーラン』では「始原の家」と呼ばれている。この神殿は涸れ川の川床の、しかも最も低い位置に建てられているので、例えば40年に1回あるかないかの豪雨のあとは、湖に浮かぶ石造りの直方体になる。「創世記」第6章以下にあるノア方舟の伝承では、40日にわたる大雨のあと大洪水が生じたので、ノアは三階建ての四角い舟をつくりその中に自分の家族とあらゆる動植物の番いの種子を入れ、洪水の上を漂流した。40日あと、方舟がアララト山の山頂に漂着したとき、ノアは大雨が止み洪水が引いたのを知り、「生めよ、殖えよ、地に満ちよ」という神の声と共に舟から外に出て人類と自然の祖となった。

メッカのカアバ神殿の床は地上2メートルの所にある。床までは地上から土石が積み上げられている。太陰暦12月の上旬から中旬にかけメッカ巡礼者は時計の針の逆廻わりに神殿の周りを廻る。前イスラム時代は12月15日が新年であったようである。紀元前6世紀のイランのアケメネス王朝にもカアバ神殿と同じ石の建造物がある。1つはベルセポリス宮殿北西5キロのナクシェ・ロスタムにあるゾロアスターのカアバである。カアバは外見上は三階建てになっていて飾り窓が3段に付けられている。1階の窓の付いた部分は土石が詰まっている。床は地上5メートルの所にあり、メッカのカアバと同じような四角い入り口が開いている。

メッカのカアバ神殿の周囲には前イスラム時代からイスラム初期の墓があったが、整備された。イランのゾロアスターのカアバの前面にはダリウス大王の巨大な磨崖墓の他、同規模の3基の磨崖墓がある。アケメネス朝の始祖キュロス大王のバサルガダエにもハール

ーンの牢獄と呼ばれるカアバがある。このカアバはナクシェ・ロスタムのゾロアスターのカアバと同じものであったが崩壊が進行している。このカアバの近くにはキュロス大王の墓（疑問視する説もある）がある。

韓国の慶州には新羅の善徳女王（7世紀）によって建立されたとされる^{せんせいだい}瞻星台がある。瞻星台は直方体ではなく牛乳びんのような形をしている。床は地上4メートルの所にあり、梯子を掛けて四角い入り口から中に入った。床の中央にはカアバと同じように穴あるいは窪みがつくられている。瞻星台の鏡池という穴には、祭りのときはそこに水を満たした。女性たちは瞻星台の周囲を踊りながら廻った。瞻星台は新羅の陵園に接続する建造物で、西アジアのカアバと同じような祖先霊を祭る施設であった。

日本の平安宮の内裏の天皇の常の御所であった清涼殿東廂の南に^{いしばいのだん}石灰壇という部屋があった。この部屋の床は地面から土を積み上げてつくられ、床の表面には石灰を塗ってあった。同じものは清涼殿の東30メートルほどの^{じじゅうでん}仁寿殿にもあった。石灰壇の東南部に直径60センチ、深さ60センチの塵壺という火炉があり、穴の底に灰が残っている。冬と春には穴で火を焚いて料理をし、夏と秋は蓋をした。天皇は毎朝、床の上に円座を敷き、東100メートルの所にある温明殿に祭る賢所と、はるか東南にある伊勢神宮を礼拝した。石灰壇は西アジアのカアバと同じもので、祖先霊を祭る祭壇であった。清涼殿は東向きに建てられた宮殿で、東廂のさらに東がわには東孫廂が付いていた。

東西軸の上に建てる様式はオリエンテーションと呼ばれるもので、古代イランのペルセポリス宮殿の百柱の間の東と西はテラス状になっていた。この空間がアバダーナで、この語が宮殿の意味になった。ゾロアスター教のミトラ（ミスラ）神殿もオリエンテーションの軸上に建てられた。キリスト教は4世紀にローマ帝国の国教となるが、キリスト教の成立に影響を与えたミトラス信仰も教会堂をオリエンテーションの軸上に建てた。清涼殿は南向きではなく東向きである。天皇は毎朝東方を拝した。石灰壇の南は壁になっており、部屋の西と東は御簾や蔀で囲われ、北がわは柱間に何の囲いもなかった。

飛鳥時代、天武天皇の宮殿には^{みむろのとの}御窟殿と^{みむろのま}御窟院の2つの窓のない窟状の建物があり、1月18日の小正月の宴会や改元の宴会がその前で行われた。明日香では天武天皇の宮であった^{きよみはらのみや}飛鳥浄御原宮の遺跡から更に同じ形の正殿が見つかった。その下の皇極・齊明天皇の^{いたぶきのみや}飛鳥板蓋宮あるいは舒明天皇の飛鳥岡本宮からも2つの同じ正殿が出土した。天武天皇以前にもカアバがそれぞれの宮殿に存在したことが考えられる。

上来述べてきたカアバの床は、地面から突出した大地のへそで、上部には穴があった。梵語で大地のへそはクシיתי・ガルバという。大地のへその梵語的表現である。地母神の別の表現であるが、地蔵と漢訳された大地の胎は女性ではなく男性表象である。子供が冥土に渡る前に、川原に石積みをつくるが悪魔にそれを崩される。子供は途方に暮れる。地蔵が現れて子供を助けて石積みを完成させ、冥土に渡してくれる。石積みと川床のカアバの土壇は同じもので、いずれも死と再生、祖霊信仰の思想から出たものである。石積みの場合、胎蔵に相当する円錐の天辺には穴がないが、この円錐、三角錐、四角錐の石積み自体が死者の靈魂が入るあの世への入り口に設けられた祭壇である。古く川原に設けられ

た盆踊りの^{やぐら}櫓も同じものであった。

へそ石は1対で全体を表わした。文化によっては、へそ石は単体のものがあるが、変容したものである。単体のへそ石に1対の胎児が宿る場合は、ヤコブやヤマトタケルの伝説で見た。臼は石臼であれ木臼であれ、それはへそ石の表象であった。イサクの妻リベカの胎と景行天皇の皇后の胎を模した石臼は同じものである。後者は金関が指摘したとおり、男のお産であるので石臼を抱いて分娩の声を張り上げたのである。臼を背負って家の中を廻るのと同じ趣旨であるが、臼の周りを廻る風習もある。イランのシーラーズでは、開運（良縁を得て男児を生むこと）を求めて、娘は聖者廟に出かけ、堂の真ん中にある石臼の周りを廻る（A. J. ハーンサーリー、S. ヘダーヤト『ペルシア民俗誌』岡田恵美子、奥西峻介訳注、東洋文庫、1999年、276頁）。

イランの場合は、女性が女性原理の表象の周りを廻るが、日本では男性と女性が出てくる。イザナギノミコトとイザナミノミコトは^{あめ}天の^{うきはし}浮橋の上から矛を下ろして海の水をかき混ぜ、矛からしたたり落ちる海水が固まってできたオノコロ島に降り立ち、天の御柱を建て八尋殿を建て、^{やひろどの}両神はそれぞれ左回り、右回りに柱の周囲を廻って国々と神々を生んだ。天の御柱は両神のことばのやり取りからも分かるように、柱穴のあるへそ石の上に建っていた。男神と女神は柱をそれぞれ逆の方向に廻ることによって国生みをした。

中国の苗族の間には次のような民話が伝えられている。大洪水があり兄と妹だけが残った。子孫を残さなければならない。2人は東の山と西の山の頂上から兄は下臼（凹）を、妹は上臼（凸）を転がり落とした。すると2つの臼はピッタリと合わさった。そこで2人は結婚した。妹は目も耳も口も鼻もない肉塊を生んだ。兄は肉塊を細断して四方に投げ棄てた。翌朝起きて見ると、あたり一面、彼らの子孫で満ち溢れていた（村松一弥編訳『苗族民話集』東洋文庫、1974年、12-3頁）。イザナギ・イザナミ両神の天の御柱と礎石、両神の成り余った所と成り合わない所、ヒルのような肉塊の子のモチーフが苗族の民話では上のような表われ方をしている。このヒルコを舟に乗せて棄てたあと、両神は国々と神々を生むのである。

大洪水のあと^{ふっき}伏羲と^{じよか}女媧の兄妹だけが残った。兄は結婚したいと思ったが、妹は自分に追いついたら結婚するといって、大きな山の周りを廻ったが、兄は追いつけなかった。亀に教えられて逆に回り、やっと妹に追いつけた。さらに各自が臼を山の上から転がすと、麓で臼がピッタリ重なったので2人は結婚した。生まれた子供は手も足もないただの肉の塊りであった。それを切り刻むと、1つ1つが男の子になった。

このタイプの神話は苗族や瑶族の間に非常に多く分布するという。兄妹が巨木の周りをめぐる話も少なくない。この種の洪水神話はイザナギ・イザナミ神話と共通する点が少なくない。こうした洪水神話はミャオ族、ヤオ族だけでなく、チュワン族、イ族などの西南中国の少数民族の間にも分布する。イザナミは火の神カグツチを生んで死ぬが、イザナギは剣でカグツチを切断する。そのとき、カグツチの切断された部分から8柱の神が生まれ出た（佐々木高明『照葉樹林文化の道　ブータン・雲南から日本へ』NHK ブックス、1982年、172-4頁）。

朝鮮では8月15日の秋夕の一般行事が終わったあと、16日から18日まで女子の解放日が続く。16日と17日は若者や娘たちが我を忘れて酒に酔い踊りだす。18日には女たちが仏堂^{ブルタン}という所に遊びに出かける。そこには石の弥勒があって、傍らにある石臼を回して出産の願掛けをする。心に念じつつ石臼を回しているうちに、上臼が下臼に密着して動かなくなれば願いが叶うという。これが終わると雑歌乱舞しながら半ば酒に酔いつつ帰る。町に入るころ、綱引きの準備ができており、女たちもこれに参加する。娘たちは裳に小石を一杯包んで綱の上に座ったり、敵方の娘たちと罵り合いながら夜を更かす（秋葉隆『朝鮮民俗誌』名著出版、1980年<1954年>、46-7頁）。

前述したように、イラン人の女性は聖者廟の堂内に置かれた石臼の周りを廻り、男児の出産を祈願する。2つの石臼が合体するのは苗族などに見られる凹凸の石臼の合体と同じもので、結婚や出産を叶えるしるしである。願掛けをする娘たちがへそ石の周囲を廻ると、メッカのカアバ神殿を巡礼が廻るのは本来同じものであった。上部の凹んだ自然石の周囲に堂屋が建てられ、それが聖者廟や仏堂に変容したのである。

へそ石は、あの世からの誕生の場であると同時に、この世からあの世に誕生する場でもあった。へそ石や臼は誕生と死を表象した。チングス・カン²は7歳のときモンゴル族の支派であるメルキト族によって捕虜として連れ去られ、黒い斑のある子山羊の皮衣を着せられて、バイカル湖の南に注ぐセレンゲ川の辺りでメルキト人の臼を搗いた（『モンゴル秘史』2、村上正二訳注、東洋文庫、1972年、26頁）。

捕虜や奴隷は境界の人であった。境界の人は斑の表象を身に着けた。皮衣はさらに古くは生まの毛皮で、それを身に着けることは祖先の国に渡る服装であった。幼児テムジンは、メルキト族の考え次第で、いつでもあの世に渡ることになっていたと考えられる。メルキト族の本拠地を流れるセレンゲ川の辺りはその境界であった。前述したように、へそ石であるメッカのカアバは涸れ川の川床に建てられた。日本の盆踊りの^{やぐら}櫓は川原に設けられた。そこでは処刑が行われ、非人がたむろし、芝居が打たれた。テムジンが川原で臼を搗いたのは、モンゴル族が伝承していた境界におけるある種の刑罰であったと考えられる。

ヘブライの伝承によると、怪力の士師（裁き人）サムソンは母の胎内にあるときからナージール人として神に捧げられていたので（サムソンはその母が聖婚で孕った子であった）、頭にかみそりを当てたことがなかった。もし、髪の毛を剃られたら力が抜け、並の人間のようになった。サムソンは遊女デリラを愛し、その秘密を教えたので、彼女はペリシテ人にそのことを告げる。彼女はサムソンを眠らせ、頭髮7房を剃らせた。サムソンは無力となり捕らえられて、目を抉られ、牢の中で臼を碾いた。その間にもサムソンの髪の毛は少しずつ伸びていった。

その後、ペリシテ人は神殿で彼らの神を祭り犠牲を捧げ、サムソンを牢から連れ出して笑いものにした。神殿は祭の人でごったがえしていた。屋上にも3000人もの男女がいた。サムソンが神殿を支える2本の柱を押すと、神殿は崩壊し、彼をはじめとして全ての者が命を失った（『士師記』第16章）。

サムソンの母はナージール族の娘であった。ナージール族は聖別された氏族で、その女

子は聖娼として寄りくる神の胤を宿した。生まれる子は神の子であった。それには3つの条件を守る義務があった。(1) 髪を切らない (2) 酒を飲まない (3) 死体に触れないことであった。サムソンはデリラと酒を飲み (2), デリラに髪を剃られ (1), 神殿崩壊で生じた死者に触れた (3)。サムソンの身体からは神の力は去り、彼は死すべき運命となった。

テムジンは境界であるセレンゲ川の川原で臼を搗いた。サムソンは境界である牢獄や神殿で臼を碾いた。あまつさえ、サムソンは両目を抉られて境界人にされた。臼は出産の象徴ばかりでなく死の象徴ともされたことがうかがえる。川原にしても神殿にしても、神に接する祭りの日は極めて多くの人びとが蝟集した。その中で古くには刑死者は臼を碾いてから処刑されたと考えられる。

『漢書』列伝第6「楚元王伝」にいう。楚の元王は、若い頃に共に学んだ穆生、白生、申公らを尊敬し礼遇した。元王は在位23年で薨じ、その子夷王が即位した。夷王は在位4年で薨じ、子の^ぼ戊が嗣いだ。穆生は酒を嗜まないで、元王は宴会のつど、いつも穆生のために^{あまざけ}醴を用意した。王戊が即位してから、このことがないがしろにされるようになった。穆は怖れて王の許を去り、病いと称して床に臥した。申公と白生がこれを諭したが、穆生は「先王が我ら3人を礼遇されたのは道が存在したからである。王戊がこれをゆるがせにされたのは、道を忘れたからだ。道を忘れた人とは共にいることはできない」といって謝絶した。申公と白生だけが留まることになった。

王戊は乱行が嵩じ、領地を削られたので呉と陰謀を通じた。申公と白生は王を諫めたので、王は2人を鎖で繋いで労役に服させ、^{あか}赭い衣服を着せ、毎日杵と臼を持って市場で臼を搗かせた。王の叔父が人を介して諫めたところ、「叔父が私に同調しないのなら、私が叔父を討とう」と王はいった。叔父は怖れて京師に逃げた。王戊は呉と組んで漢に謀叛を起こしたが、平定され戊は自殺しその軍は漢に降伏した(『漢書』中巻、列伝I、小竹武夫訳、筑摩書房、1978年、59-60頁)。

市場は商業活動の場であったほかに死刑執行の場でもあった。市中での死刑を棄市と称し、死体を曝しものにするのを磔と称した。これらの刑は清末民初まで続けられた。棄市などとは別に、軽い労役刑も市場で行われることもあった。秦律(司空律)によると、刑人は赤服、赤帽姿で、^{かせ}械具、黒網、足環でいましめられ、市中で^{しょう}舂(臼搗き)の作業に従事された。上掲『漢書』の事例はこれである(渡部武「中国古代の市」『月刊百科』1984年9月、平凡社、12頁)。

市場が公開の処刑場とされたのは欧州の市場、西アジアの市場でも同じであった。日本の刑場も古くは同じであり、飛鳥、奈良時代からすでに行われていた。赤服は、受刑者が処刑後、解体され血液と脂肪で汚された状態を表象したものであろう。あるいは、受刑者がこれから参入するトーテム動物の生ま皮を被せられた姿であらう。円錐形の赤帽は、血まみれになった動物の頭部の生ま皮の表象であらう。あるいは境界の円錐型の石積みを表象であらう。これらの毛皮を身に着けた受刑者は、腰と首を切断されて棄市され、着ている毛皮や衣服を血に染めた。1966年、中国の毛沢東が文化大革命を発動し、軍その他の

国家機関の幹部を肅清したとき、紅衛兵によって引きずり出された人物は一樣に首から罪状を書いた紙を掛け、円錐帽を被らされていた。斑の衣服と三角帽を身につけた境界の人であるピエロと同じに、人の気紛れによって、生かすも殺すもその場の気分次第であった。

N. ネフスキーが大正9年（1920）9月21日付で柳田国男に出した書翰に次のようなことをいっている。陸前佐沼町では昔は子供を2, 3人以上は持たなかった。それ以上の子供が生まれると、白をかぶせて殺したという。この習慣がウスゴロ（白殺）といって、このようにして殺された子をワカバという。また、^{よつくら}四倉から王山温泉に向かうときに雇った俵の車夫の話をのせる。この地方には神明という女乞食^{しんめい}がいる。神名は左右の手にお神明様（伊勢神宮に由来する）を持って各戸を廻り歩く。車夫によると、白をつくる神明がいたが今は廃業して盲目になり子守りをしている。神明に奉仕する女たちは、初めは立派な目あきののだが、毎日、神を自分の体へ乗り移すから、お仕舞いに失明するという（『月と不死』東洋文庫、1971年、220-1, 227頁）。

白やへそ石は、新生児が大地の胎に戻るための入り口であったことがよく分かる。天照大神に奉仕する神明が白をつくっていたが、盲目になり廃業したとある。サムソンは盲目にされて白を碾かされた。白は麦などの穀物の脱穀や製粉のために発明されたものである。大地のへそに類似するため、白は移動可能なへそとされ、代用されるようになったのであろう。神明もサムソンも盲目でなければならなかった。その理由は白ではなく、あの世に通じるトンネルの闇をいおうとしたのであった。

ネフスキーは盲目の老女のいる村で、ここの鎮守神が^{はくさん}白山神社であると教わった。さらに、これを誤ってシラヤマ神社というと百姓が「我々はバンタではない」といって非常に怒ると聞いた。ここではシラヤマ権現はバンタの神になっている。^{はくさん}白山神社のご神体は白だと聞いた。バンタの外に箕直しと^{おさか}箴搔きのような人びとの住む部落もあった（前掲書、221-2頁）。^{はくさん}白山神社はこの地方では差別された人びとの信仰する神社とはなっていない。ここのご神体が白であることに注目したい。

前述したように、堂内に白を安置する習慣がカアバ神殿と併存した。サムソンが目を抉られて引き出された神殿もその1つである。白山神社はここではそうでないが、民俗学では差別視される神社である。その信仰がへそ石、白の信仰を持った集団であったため、倭人の信仰の対象と異なっていた。宮田登が『神の民俗誌』（岩波新書1979年）の中で論じた三河の花祭りで設置されるシラヤマの構造がカアバと同じであることは以前に論じたことがある。仏教とはまた別の信仰形態がもたらされたが、大きく発展することなく異様視され、差別視されたのであろう。

ネフスキーは、これ以上不要な子供は白をかぶせて殺したという。白を通じて天の神に返すのは、神の取り分である初子、初物であったが、余分の子に変わってしまったと考えられる。神社や祠堂の中に安置された白はより古くはへそ石であったらしいことは前述した。正月行事では白に供物を載せるが、これは初物、初子の供儀と同じもので、神に新しい力を送ることを意味した。境界である市場で処刑される者が白を搗いたのは、神に供儀される刑人を凹みを通じて送るのが原義であった。

葬儀で婦人が臼を搗く^{しょうどう}春堂という風習があった。松本信廣「古代インドシナ稲作民宗教思想の研究」＜1965年＞『日本民族文化の研究』3 東南アジア文化と日本（講談社、1978年、65-228頁）は、東南アジア出土の大量の銅鼓を整理し、南方の葬儀において臼を搗くのは銅鼓を踏み鳴らす豊穰儀礼に由来するものと見た。日本神話で猿女君が宇氣槽^{うけふね}をさかさにし、杵のようなもので衝く鎮魂儀礼もこれと同類と考えた（220-3頁）。大林太良『葬制の起源』（角川選書、1977年）は松本信廣の持論を述べる。萩原秀三郎「魏志倭人伝と江南」『東アジアの古代文化』30号、1982年も、松本の春堂の起源を銅鼓を打つ説に求め、自説を展開する。

日本神話のアメワカヒコ（天若日子）は、天孫降臨に先立ち出雲のオホクニヌシノミコト（大国主命）に国土を差し出すようにと遣わされた使者であった。天若日子は大国主の娘シタテルヒメ（下照姫）と結婚し復奏しなかった。天は雉を送って復命を促したが、若日子は雉を射殺する。矢は天に達したが、天が投げ返すと、新嘗の床で物忌みをして臥せていた若日子を刺して殺す。妻の下照姫と若日子の父と妻子眷族が泣き悲しみ、喪屋を建て、河雁を岐佐理持^{きさりもち}、鷺を掃持^{さぎはきもち}、翠鳥を御食人^{みけびと}、雀を碓女^{うすめ}、雉を哭女^{なきめ}として八日八夜の葬を行った（『古事記』による。『日本書紀』では別様の記述がある）。このとき、アヂスキタカヒコネの神が弔問に訪れるが、若日子の父とその妻はこの神が若日子に似ているため、若日子は死んだのではないといって手足に取りすがって泣き悲しんだ。そこでアヂスキタカヒコネは自分を穢れた死人と同一視したといって、剣で喪屋を切り伏せ足で蹴散らした。

天若日子の葬では、参列者は各種の鳥の面をつけたことが分かる。若日子がこれから趣く鳥トーテムの世界の住人を表象しているのである。喪屋の中にこれらの参列者が集った。雀が臼を持っているのが注目される。臼は葬儀の際に見られることは上述した。キサリ持ちのキサリは宮田登は臼を搗く木の杵であるという。松岡静雄『日本古語大辞典』語誌（刀江書院、1929年）はキサリを木製の鋤と見る。これが状況に近いであろう。あるいは、キサリは炊飯具やかまどの模造品であるかも知れない。

考古学での墓地の発掘調査で出土する模造品には鋤、炊飯具、かまどなどがあるからである。大地のへそは炉やかまど、あるいは臼と同一視された。天若日子の喪屋は、白山神社の本殿と同じもので、その中に臼が安置されていたのである。へそ中ではかまどの火が焚かれた。京都御所の清涼殿にある石灰壇の塵壺には灰が残っている。この穴では日常料理のための火が焚かれたのではなく、穢れを清める死と再生の儀礼用の火が焚かれたのである。

この論文の主題の1つは、ニニギノミコトとヤコブの類同と大国主命とヨセフの類同を論じることである。ヨセフはヤコブとその妻ラケルの間に長い年月の不妊のあとやっと儲けた子である。ベニヤミンはヨセフのあとヤコブとラケルの間に生まれたヤコブの12人の息子の末子である。細部は別の論考で後述することになるが、エジプトの宰相となったヨセフの許を飢饉に苦しむヤコブの子らが、エジプトに麦をもらうために下ってくる。最初はヨセフが自分たちがエジプトに奴隷に売り飛ばした弟とは知る由もなかった。ヨセフ

は自分が彼らの兄弟であることを告げた。ヨセフは引き留めていた弟ベニヤミンも解放し、カナンにいる父ヤコブの許に帰らせた。ヤコブは一族と共にエジプトに下ってきた。ヨセフは父と兄弟たちに、エジプトで最もよいラメセス地方の土地を与えた（『創世記』第42章-47章）。

ヨセフの弟のベニヤミンは、ヤコブの12人の息子の末子で天若日子に当る。ヨセフは大国主である。ヤコブ（天孫ニニギノミコト）がエジプトに下る前に天若日子は大国主と国土移譲の交渉にくるが、大国主の娘と結婚して天に復奏しなかった。天若日子の結婚には大国主のスセリヒメとの結婚が投影されている。天若日子は冬至の日に、死から再生した太陽の子として天へ帰ってゆく。ヤコブはエジプトに下り、ヨセフから土地を譲られる。ベニヤミンが太陽の子であるしるしは、麦を入れた彼の袋の口の所に隠した銀の大きな盃であった。ベニヤミンはカナンからエジプトに下って死ぬことはなかったが、父のヤコブはこの子に死の危険があるのではないかと常に心配した。ベニヤミンとは「右手の息子、幸福の息子」の意で、兄のヨセフとは双生児ではないが、兄のアルテル・エゴであった。ヤコブの病いが革まったとき、12人の息子と呼び寄せて各人を祝福した。「ベニヤミンはかみ裂く狼。^{あした}朝には獲物に食らいつき、夕には奪ったものを分け合う」（49. 27）。

この場合の日猶の神話、伝承の類同性は他と比べて明快ではない。発信源の原型がどのような形であったのか究明したいものである。エジプトでヨセフが自分の正体を明かしたとき、兄弟みなが号泣し、その声は隣の部屋にいるエジプト人の側近にもよく聞こえるほどであった。ヨセフはベニヤミンの首を抱いて泣いた。ベニヤミンもヨセフの首を抱いて泣いた。天若日子の死と再生を象徴する葬儀の場では、若日子の父とその妻子が号泣した外に、雉が^{あめ}哭き女として葬列に参加した。ベニヤミンと天若日子は本来は、そのアルテル・エゴであるヨセフや大国主のために死に、再び蘇る小さ子であった。

松前健は「天若日子神話考」『松前 健 著作集』第9巻、日本神話論 1（おうふう、1998年）の中で、土居光知『古代伝説と文学』（岩波書店、1960年）の論じた学説を紹介する。これらの神を代表して殺されるのは、邑落の祭司の男児で、それは王子、若宮、天若日子などと呼ばれた。天若日子とアヂスキタカヒコネによって演じられる死と再生の儀礼は、バビロニアのタンムズのそれと同じものであった。アヂスキのスキとは鋤で、この儀礼の根本には年ごとに殺されては復活する穀霊の死と再生の儀礼があった。アヂスキタカヒコネが天若日子の喪屋を斬りすえた神話は、三河の花祭りの白山を山見鬼が^{まさかり}鉞で切りわって出てくる行事と同じものである。土居はこれらの天若日子、下照姫、アヂスキタカヒコネの神の劇が演じられた地方は出雲地方であろうとする（262-83頁）。

天若日子の儀礼が舞台で演じられたことは疑う余地がない。この演劇は単に放浪の芸能者を雇って演じたというものではなく、中央アジアから西アジアにわたって存在した、穀霊の死と再生を演じる芸能の伝統を継承した人たちによって演じられたのであった。

愛護^{あいご}の若^{わか}の話。説経節に伝えられる物語によると、二条蔵人前の左大臣清平という公卿がいたが子宝に恵まれなかった。長谷観音に詣り申し子を祈誓する。生まれた子は愛護と名づけられる。愛護が13歳になったとき、母が仏に不信のことばを吐いたため他界する。

父の清平は後妻の雲居を迎える。雲居は愛護の姿を見て恋慕するが叶えられなかった。雲居は愛護が清平の宝物を盗んだとざん言したので、清平は愛護を縛り花園山の桜の古木に吊り上げた。愛護は口から血を吐き、死んだと思われた。亡き母は冥途で閻魔大王の許しを得て、いたちの姿で二条の御所に出てから山に着き、桜の古木に駆け上って綱を食い切った。下では猿が抱き下ろして介抱した。いたちの姿をした母がいった「比叡山西塔北谷の自分の兄の阿闍梨を訪ねなさい」。

愛護の若は比叡の山に登り始めた。雨は降るし道は暗くゆくべき方角も分からなかった。はるか南にともしびがかすかに見える。下ってゆくと貧しい小屋があった。小屋の戸をたたき1夜の宿を請うた。戸主の賤民は、愛護の若が二条蔵人清平の総領で、継母のざん言で比叡山の伯父を訪ねようと登ってきたが、雨が降り道に迷っているのを聞き、招き入れ臼の上に戸板を敷き、荒薦を敷いて若君に奉り、賀茂川の流れて清めた御飯をかわらけに入れ若君に進めた。この御代以来、神の前の清めには荒薦を敷くことになった。・・・(新潮日本古典集成『説経集』室木弥太郎校注、新潮社、1977年、301-29頁)。

ここで注目されるのは、賤民と貴族の対照と、臼と戸板と荒薦である。臼、戸板、荒薦はいずれも境界を表象する聖なるものであった。臼は貴人にも賤民にも刑人にも、誕生にも葬儀にも用いられてきた。臼は大地のへその表象である。戸板は入り口の戸あるいは雨戸のことで、戸外での変死者、水死者を自宅に運搬するのに用いられる。あるいは行き倒れは役所あるいは悲田院の施設に運ばれ処置された。荒薦はその上で処刑が行われたり、死者に被せたりした。叡山の登山道途中に住んでいた坂の者は、観音の申し子である愛護の若を境界の凹みを表象した臼の上に置いた戸板と荒薦の上に座らせたのである。その場所は死の穢れの場所であり、清めの場所であった。愛護の若とその実母である御台所の間には慟哭の場面がある。愛護の若と賤民との間にも同じような場面がある。神の子が非業の死をとげ、その母が号泣する場面は嘆きの御母（マーテル・ドロローサ）としてキリスト教美術のテーマの1つになっているが、神の子とその非業の死を嘆く、性別、単複を問わない人の複合は多くの伝承の中で見られる。

朝鮮では、子供が瘠せ細る病にかかったとき、上元の日には百家の飯をもらってきて、臼の上に犬と対座し、1匙は犬に食べさせ、1匙は自分が食べれば、再びこのような病いにかからないという(洪錫謨『東國歳時記』『朝鮮歳時記』所収、姜在彦訳注、東洋文庫、1971年、50頁)。上元の日には種々の厄払いが行われた。上元の朝、誰かを見ればその名を呼ぶ。先方が返事をすれば、すかさず「わが暑気を買え」という。これを売暑という。こうして暑を売った者は、その年は暑気あたりしないという(前掲書、49頁)。また、上元の日には犬に食餌を与えない。食餌を与えれば夏に蠅がわき、犬が痩せるからである。だから俗に、腹の空いた人を、上元の日犬のようだと冗談をいう(前掲書、50頁)。

朝鮮の上元の風習には年の変わり目の厄除けの名残りが見られる。年の変わり目が1月1日であることはいうまでもないが、古くは1月15日の満月の日が年の変わり目で、小正月が1月1日であった時代が想定される。太陰暦で宗教行事を行うイスラム教では、メッカに詣る大巡礼は、イスラム暦12月の12日に全てを終了して帰途につく。イランでは

毎年、新年直前の年末の水曜日をチャハールシャンベ・スーリーという。水曜日は、曜日が制定された時代、古代の中近東では年初として固定されたことがあった。太陰暦で1年が50週と4日から成る場合、余分の4日は天から盗んできた名前のない日とされた。太陽暦で1年が52週と1日か2日から成る場合もそれは同様であった。イランではその前夜、路上に枯れ枝の堆積を7つ8つ並べ、それに点火してその上を跳んで渡る。このとき、「あなたの赤は私のもの、私の黄はあなたのもの」と各人は口ぐちに叫ぶ。赤はもちろん元気を、黄は病気を指し、年末の厄払いが行われるのである。朝鮮の風習の小正月の暑気禊りに相当するイランの年末の風習で、厄払いがその根底にある。

イランのチャハールシャンベ・スーリーでは家屋の入り口の陸屋根^{ろくやね}で火を焚いて食物を用意し、群行して来訪する祖先霊を待つ。屋根は平らで泥土でつくるので火事の心配はない。火を焚く前に、旧い年に使った土器の食器を道路に投げ落とす。新しい食器に替えて厄払いをするのである。（チャハールシャンベ・スーリーについては『イラン研究』第2号、大阪外国語大学地域文化学科ペルシア語専攻、2006年 所収の高橋陽子「ノウルーズ前の伝統行事—チャハールシャンベ・スーリー—」と森茂男「『Sūr Saxwan』(訳注) 1」を参照せよ）。

火を焚くのは来訪する祖霊たちに目印するためとイラン人は考えている。食事は祖霊に食べてもらうものだとするのは正しいが、生きている者たちと共食するのが古い形式であろう。生きている者は祖先からエネルギーをもらい、祖霊は生きている者からエネルギーをもらったのである。このようなエネルギーを持った人や祖霊をアルターヴァーン／アルターヴァーンといった。アルターヴァーンはウラーボーンに転化し、北伝仏教で盂蘭盆の形で採り入れられた。もとは中期ペルシア語のアルターヴァーンたちの祭り(ヤジシェン)のことであった。

日本には正月の庭かまどの行事があった。庭とは家の前の庭のことであるが、古来の民家では、殊に玄関の前の庭から始めて、玄関のたたきから奥のかまどのあるある炊事場に至る細長い土間を現在でもニワと呼ぶ。玄関の入り口で、婚儀や葬儀のとき火を焚く習慣が現在でも残っている。世界の民俗にもこの習慣は見られる。玄関の上がり^{おぼだ}がまちに置いた火鉢に、夏冬を問わず炭火を埋ける風習がある。井原西鶴の『世間胸算用^{むねざんよう}』によると、町中の大店では、仕用人たちが玄関の土間にかまどを築き、正月の食事を調理した。民家でも玄関にかまどを築いて食事をつくった。民家には、外の庭に柴の堆積を1つ2つ作り、火をつけてその上を跳ぶ習慣がある。庭かまどは正月に帰ってくる祖霊と共食する食物を入り口でつくる古い習慣であった。因みに、古い民家には広めの玄関のたたきのある場合、そこに現在は使うことのない井戸が掘ってあることがある。

入り口の敷居の場所で火を焚いたり、たたきの所で築く庭かまどや盆かまどで祖霊に供える食物を調理するのを考えると、玄関のたたきにある井戸は、あの世への入り口であり、あの世からの出口であったことが分かる。時代と共に、これらの火と水の場所は土間の最奥部に移動し、現在見る形式になったと思われる。特別な儀式があると、古い形式が先祖返りしてくるのである。

愛護の若が比叡山に登る途中、賤が屋で1夜の宿を請うたときに受けた接待は、臼の上に戸板を乗せ、その上に荒薦を敷いて座らされ、食物を供されるそれであった。賤が屋は大きい民家の入り口のようなものがあるわけではないので、民間にこの形式の座をしつらえて、貴人で観音の申し子を遇したのであろう。朝鮮の小正月の厄払いの行事では、その日は食餌を攝らない習慣になっている犬と病身の子が、恐らくは戸板や薦を乗せた臼の上に座り、食物を食べたのであろう。

犬は正月、村の入り口の柱に磔にして、悪霊の侵入を防御するために用いられた。犬はまた、三伏の末、人間が健康を取り戻すために賞味される。犬は正月と盆に人間の世界を訪れてくる祖先獣とされた時代があったことを物語る。犬は小正月には絶食し、忌みの状態にあった。その犬が病身の子供と共食し、子供の病を食ってくると人々は考えたのである。子供は反対に、共食することによって、犬からエネルギーをもらい、健康体になれたのである。朝鮮でも、多くの儀礼がそうであるように、この厄払いも戸口で行われたであろう。犬が餌を与えられなかった小正月は、本来ならば人間が忌みの状態で絶食すべきものを、神である犬が絶食を強いられたのである。

臼は入り口や玄関のたたきと深い関係があった。臼は収納場所のないときは、このような空間の隅に置かれた。これは民族誌的に広く見られる現象である。入り口の敷居の下には、幼児を埋葬する風習がある。日本でも非合法ではあるが、幼児の再生（母体の妊娠）を願って行われた。イランの聖者廟の堂の真ん中に臼が安置され、娘たちがその周囲を廻る儀礼は前述した。聖者廟の堂は中国の春堂にあたるもので、堂の地下には聖者の遺体が埋葬されていると信じられている。同一の聖者の名を冠した聖者廟は数多くあるので、信仰の世界とは別の解釈もある。このような聖廟は先イスラム時代からの連続と考えられるものもあるからである。聖廟の周辺は墓地になっていて、死者と臼は強いつながりを持つ。

メッカのカアバ神殿の前面に小さい祠堂があり、中にイブラーヒーム（アブラハム）のお立ち台と呼ばれる上面の凹んだ石が安置してある。イブラーヒームがカアバ建設の際、この石の上に立って指揮したのでこの名がある。この祠堂と白石は春堂である。カアバ自体も白石の上に覆い屋をつけたものであるので春堂である。より古いアケメネス朝のカアバは2つあった。メッカのカアバも大小2つある。京都の内裏にも2つの石灰壇があったことは前述した。これら2つのものは死と再生の表象である。メッカのカアバ神殿の東がわの壁1.5メートルの高さの所に黒石がはめ込んである。黒石の両がわは女陰の陰唇状の銀板で囲ってある。巡礼者はカアバを巡回するたびに指で触れたりキスしたりする。西がわの壁にも1.5メートルの高さの所に黒石がはめ込んである。こちらは触わるだけでキスはしない。カアバ神殿の周囲は古くは多くの墓で囲繞されていた。カアバは死と誕生の場であった。

中国の伝承では、夏の桀王を討ち、湯王を援けて殷の建国に功績のあった名相伊尹^{いゐん}と孔子は、空桑から生まれたという。小南一郎「水底の都市」（『世界口承文芸研究』第6号、大阪外国語大学口承文芸研究、1985年）は『呂氏春秋』本味篇の伊尹の誕生を挙げる。伊尹の母親は夢のお告げで、水に沈む邑から脱出したが、後を振りかえったために桑の木

となってしまった。有佐氏の女子がその桑の木を手に入れ、木の空洞の中に嬰兒を得た。この子を王に献上すると、王は料理人に養育させた。この子が伊尹となった。母は洪水に邑が沈む前に、臼から水が出て洪水になった夢を見ている。臼と空桑とは別々に現れるが、それなりの意味があると思う。

W. エバーハルト『古代中国の地方文化』（白鳥芳郎監訳、六興出版、1987年）はM. グラネの説として洪水伝説と蛙の関係を挙げる。臼や炉の中に蛙が現れると、それは洪水の前兆であるという。臼はどういう意味があるのか。グラネは臼は楽器だと断言する。彼は臼と鼓をつなげ、華南では鼓に蛙の意匠がついていると強調する（183頁）。

メッカのカアバはへそ石で臼を表象した。臼から2つの黒い子供の頭が覗いている。景行天皇の臼の伝承によると、2人の皇子が生まれた。カアバ神殿はイスラムの聖所に指定される以前から同じ形式であったと考えられるので、カアバの原型の思想が日本神話にも見られると考える。アケメネス朝のカアバには黒石をはめ込んだ形跡はない。アケメネス朝の場合、2つのカアバが併存するので、それぞれのカアバから双子ではなく1人の子供が生まれたと考えられる。中国の伝承では、臼や炉の中に蛙が現れると洪水になるという。炉や臼は正月の庭かまどや清涼殿の塵壺と同じように火を焚く場であった。蛙は水の生物であるので、それが炉や臼に現れると火を消して洪水を起こすと信じられた。蛙は子宮や流産した胎児と同一視されるのは広く見られるので、洪水は羊水の流出を表わす。メッカのカアバは前述したように、涸れ川の川床のいちばん深い場所に位置するので、何十年に1度の洪水に見舞われたときは、2つの黒石は水面にくる

メッカのカアバ神殿には蛙の伝承は付随していない。日本の明日香村川原にある亀石には伝承があり、もしこれが西に向けば洪水が起きるといわれる。亀石は蛙石のことで、石の塊りは胎盤の表象である。へその緒を表わす紐状の溝が石の周辺に刻られているのが認められる。川原の亀石は天武天皇・持統天皇合葬陵に向けて設置された天皇・皇后の再生を祈願するものであった。このことは以前にも論じておいたが、内裏の東がわにある陽明門（宣明門）には蛙石が置いてあった。門は清涼殿、仁寿殿をつなぐ東西軸の上にあり、蛙は天皇の守護神とされた時代があった。

東京・大手町にある平将門の首塚には数体の蛙の石像がある。これらの蛙はいつごろのものか自分は知らないが、怨霊へのお供えであるに違いない。神田明神の境内に将門を祭る相殿がある。大手町の首塚の蛙は、恐らくは江戸城の守護神として置かれたものであろう。そうだとすれば、蛙は江戸時代初期に置かれたものであろう。徳川秀忠の時代、神田明神は江戸城下の総鎮守とされたので、蛙の記憶が先祖返りしたと考えられる。内裏の東がわの陽明門の蛙石が想起される。清涼殿は天皇の崩御により建て替えられた。時代によっては、殿の東がわに溝があり、水が流れていた。これら全ての要素の複合が文化複合を形成していた。

柳田国男は『女性と民間伝承』（1932年）の中の「石の枕」に次のように書く。近江などの村々の墓地には枕石というものがあり、葬送の日に棺を置く石だといっている。枕石といわれるように、中凹みの石で他の地方にも数多くある。姥神信仰と深い関係があると

語り伝えられている。大部分の姥石は川岸あるいは水の中にある。姥石のほかに、小さい石があり、こちらの中が凹み、真ん中に穴があるので臼石ともいっている。柳田の郷里に近い姫路城の姥石は絵葉書にもなっていて有名であるが、加藤清正がこの城の石垣を築いたとき、いくら積んでもすぐに崩れるので困っていると、夜分、名も知らぬ老女が小石を携えてきて、石垣の上に置いた。以後、崩れぬようになった（『定本 柳田国男集』第8巻、筑摩書房、414-5頁）。

柳田のいう2種の大小の臼石は墓地にあり、柳田の集めた事例は数えきれないほどあるという。大きい方の石には埋葬直前の棺あるいは死体をのせた。枕石というのは、横たえられた死体が、凹みあるいは穴を通じてあの世と交信したのだという。シャマンはこのような石に腰かけて神のこたばを伝えた（前掲書、415頁）。

上来述べてきたように、へそ石は2つが1体となっているのが本来の形式であったと考えられる。景行天皇の皇子は大臼と小白の名をつけられた。姥石の大小は川岸あるいは水中にある。これは洪水の中のカアバ神殿や2つの黒石の変異形である。臼石と死体、白石と新生児の組み合わせは2種類の誕生を表象する。あとで考察するが、ヤコブがハランに住む母の兄ラバンを訪ねていったとき、途中、日が暮れたので、そこにあった石を枕にして横たわった。彼は重大な夢と主のお告げを夢見た（『創世記』28、10-15）。

柳田は姫路城の石垣の上に姥石をのせたら、城壁が崩れなくなったという。城壁に石臼を使った例はいくつもあり、その説明は、城主が急場をしのぐために民の臼まで調達したことになる。そうではないと思う。城壁で囲まれた四角い広大な基壇は、濠に囲まれた巨大なカアバで、織田信長が築いた安土城の天守閣は、舞台あるいは祭壇としての伝統を保持していた。

国分直一は、柳田の「石の枕」を読んだあと、姫路城を訪れる機会があった。城壁を見て廻っているうちに、石臼のような凹みのある石は見出されなかったが、石臼そのものが、城壁の石垣の中に組み込まれているのを見出して驚いた。そこには俗信的土着信仰があると見た（国分直一監修、国領駿・小早川成博編集『壺状穴考 その呪術的造形の追跡』慶友社、1990年、13頁）。

仏教渡来と共に、建築物の柱礎が流入したが、礎石の中央に穴があるのは当初から柱の安定を保つためと考えられていたと思う。掘立柱は構造物の重みで沈む心配があり、地面との接触部が腐食する。礎石が地上にある場合、柱の安定度は高い。礎石が地中にあり、柱が埋められた場合でも、土の乾燥度は高い。へそ石である礎石とその上に立つ柱は、臼石と祖先柱である。塔や堂は礎石と柱を覆う覆い屋である。メッカのカアバ神殿の内部には3本の本柱が立つ。この本柱は前述したように、先イスラム時代の3柱の女神である。カアバ神殿の入り口は地上2メートルの所にあるが、その真下の地面にミイジャンという凹みがある。ミイジャンとは飼い葉桶のような桶のことで、カアバ建設のとき、イブラーヒームがイスマーイールと共に石灰を捏ねたと伝えられている。カアバの前には前述したように、イブラーヒームの場もある。

カアバ内の3本柱は、大小これら3つのへそ石に付随した柱であったと考えられる。ヨ

ヨーロッパには壁の下に基礎に石臼を埋める習慣がある。ヨーロッパの場合は、基礎に埋納するのは石臼ばかりでなく、馬の頭蓋骨やひづめ、土器、野菜のくずなどが一緒である。古い建造物の基礎や敷居や炉石の下に壺が埋められる（J・ヘイスティングズ『宗教・倫理百科事典』第6巻、エディンバラ、1913年、113頁）。ヨーロッパでは、へその観念が薄れ、へそに投げ込む供物と共に臼が用いられている。以前に論じたことがあるが、臼は穀物の脱穀に用いられたので、その出現は比較的新しい。敷居、墓の土饅頭、基礎の下に死体や供物を供えると、年月と共に凹みができる。この凹みが大地のへその起源であろう。

基礎に埋納する臼や壺やかめはあらかじめ破壊されている。日本では、出棺のとき玄關の敷居の所で、故人が生前使用した茶碗を割る。茶碗は食物が盛られ、生命を内蔵する容器であるので、出棺のとき死体が敷居を踏ぐとき、茶碗を割って中にある生命を死体に移したのだと私はかつて考えた。生者と死者の縁切りの象徴としての行為ではない。死者は盆、正月には子孫を訪問し、共食するからである。結婚のために実家を出る娘が同じようなことをするのも、二度と実家に戻って飯を食うなという意味ではなさそうである。へその表象である臼や壺やかめを破壊するのは別の解釈も可能である。通過儀礼でへその穴を通してあの世に参入するとき、象徴的な小さい穴を破壊するのが、一連の破壊行為の起源である。土饅頭の下に眠る家族の傍らに、さらに新しい死者を葬るとき、へその穴は破壊されて新しい土饅頭が築かれる。

イランでは、墓地に死体を埋葬したあと土饅頭を築き、その上にカーペット、ゲリーム、フェルトの類を敷き、一族はその上に座り地下に眠る死者と最後の食い別れをして帰途につく。葬儀における神人共食の儀礼である。1977年に死亡したチャプリンは、スイスのジュネーヴの墓地に埋葬されたが、母親の宗教に則って、土葬したあとの土饅頭の上に食卓を置き、ほんの身内の者だけで食事をしたことが外電で報じられた。後日譚であるが、数日後、墓は発かれチャプリンの右腕が切断されて持ち去られたという。ファンの仕業ではなく、盗賊が護符として身につけるために盗んだと推測されている。

ヘロドトス『歴史』にいう。ファラオ・ランブシニトスの宝の庫をつくった大工は、死ぬ前に2人の息子に庫に入る方法を教えた。2人は盗みに入るが、1人は罠にかかって死ぬ。1人は兄弟の首を切りとり家に持ち帰った。さらに残りの死体も盗んで帰り、死体の片腕を切断してそれを衣服の下に隠して登楼し自慢話をする（2・122）。

愛護の若が叡山に向かう途中、日が暮れて坂の者の賤が屋で1夜の宿を請うたとき、主人は臼の上に戸板をのせて、その上に貴人である愛護の若を座らせ飲食を供した。朝鮮では小正月に病身の子供が、その日は絶食しなければならない犬と臼の上に座り飲食し、厄除けをした。朝鮮の小正月の行事は、人間と神である犬の神人共食の変異体である。愛護の若の場合は、神の子としての貴人の若と賤民の神人共食の表現である。

メッカのカアバ神殿の床の中央に穴があいていて、その上にフバル神が安置されていた。フバル神は先スラム時代の神の偶像であったので、ムハンマドはこの像をカアバの外に投げ棄てて破砕してしまった。フバル神は穴の底に安置されたのではなく、穴のある床面あるいは穴の上部に渡した台の上に安置されたのであろう。

「創世記」にいう。イサクの妻リベカが双子を孕んだとき、主が双子のうち兄は弟に仕えることになるだろうと予言した（25. 23）。景行天皇の双子の皇子のうち、兄のオハウスは食事を揺りに来なくなり、弟のヲウスに手足をもぎ取られて殺された。そこで長子の権利は自然にヲウスに移った。「創世記」はいう。兄のエサウは長じて狩りを好み、弟のヤコブはテントの周辺の仕事（農業）を好んだ。父のイサクはエサウを愛した。父はエサウの狩りの獲物を好んだからである。母のリベカはヤコブを愛した。あるとき、兄のエサウが疲れきって野原から帰ってきた。彼は弟のヤコブに食べ物を求めた。ヤコブは長子権と交換にエサウに食べ物を与えた。エサウは飲み食いしたあげくに立ち去っていった（25. 27-34）。

ここには狩猟文化と農耕文化の両方が見られ、農耕文化の従事者が権力を獲得する姿が描かれる。カインとアベルの物語では、エデンの園を追放されたアダムとエバは、カインとアベルの兄弟を儲けた。兄のカインは土を耕し、弟のアベルは羊を飼った。主はアベルの捧げる子羊を好み、カインの捧げる作物に目を留めなかった。カインは弟のアベルを野原に呼び出して殺した（4. 1-8）。カインの話では、カインは長子であるので、食物に関して長子権を失うことなく弟を殺した。カインとアベル、オハウスとヲウスの間には殺意があった。エサクとヤコブの間にも殺意が生じる（27. 41）。エサウは腹をへらし、ヤコブに食べ物をもらい、長子権を譲った。オハウスは数日間、食べないで、弟のヲウスに手足をもぎ取られて殺された。いずれも、長子権の移動は食物と関係した。

エサウは40歳のとき、カナンの地に共生していたヘテ人（ヒッタイト人）^{びと}の2人の娘を妻として迎えた。彼女たちは父イサクと母リベカにとって悩みの種となった（26. 34）。エサウは父イサクがカナンの娘を好まないのを知り、アブラハムの息子イシュマエルの娘を妻とした（28. 6-9）。イシュマエルはアブラハムがエジプト人の妾ハガルによって儲けた男子で、のちに母と共に追われてメッカにたどり着き、父と共にカアバ神殿を建設したと伝えられる。イシュマエルが代表する部族は移動性のある遊牧民とされる。ペドウィン族もその特徴を持つ民族である。のちにヤコブの11番目の子ヨセフが兄たちの迫害を受け穴に落とされたとき、イシュマエル族の隊商に買い取られ、ヨセフはエジプトに連れてゆかれた（37. 23-28）。イシュマエル族はエサウと姻戚関係にあったが、エサウの甥の生命を助けはしたが、エジプトに連れてゆき奴隷として売った。

イサクは晩年、盲目になった。イサクはエサウを呼んで「お前の獲物でおいしい食事をつくって欲しい。それを食べてお前を祝福しよう」といった。それを盗み聞きした母のリベカは小山羊の料理をつくり、ヤコブにエサウの衣服を着せ、小山羊の毛皮をヤコブの腕や首に巻きつけ、イサクの所へ食物を持ってゆかせた。目の見えないイサクはヤコブをエサウと思い込み、祝福を与えた。狩りから帰ってきたエサウはことの真相を知ったが、与えられた祝福を覆すことはできなかった。イサクは予言した。「お前は弟に仕えることになる。しかし、いつの日にか、お前は自分の首から軛を振り落とす」（27. 1-17, 40）。

景行天皇はヲウスを怖れて、朝廷に服従しないクマソタケル兄弟を討つことを命じた。ヲウスは叔母ヤマトヒメを訪ねて衣裳をもらい、剣を懐にして出かけた。クマソ兄弟は家

屋の新築を祝う準備をしていた。ヲウスは髪を少女の髪型に結び、叔母にもらった衣裳を着て少女になりました。クマソ兄弟は祝いの宴席で自分たちの間にヲウスを侍らせ酒を注がせた。宴たけなわになったとき、ヲウスは懷から剣を取り出し、クマソタケルの兄を刺し殺した。弟は怖れて逃げたが、ヲウスは追って捕らえ、尻から剣を突き刺した。いまわの際に弟はヲウスに対して、これからはヤマトタケルノミコと称して下さいと云ってこと切れた。

景行天皇とヤマトタケルの伝説には西アジア的な発想が集中して見られる。ヤマトタケルのクマソ征伐は、景行、成務、仲哀、神功、応神の朝廷の数次にわたるクマソ遠征が1人の英雄の事蹟として伝えられている観があるが、この神話・伝説の型そのものが外来のものである。ヤマトタケル伝の中にヤコブ伝のモチーフが多く認められる。前述したように「創世記」が直接日本に移入されたのではなく、両伝説に流れた源泉があったと考えられる。ヤコブは山羊皮を被って父イサクを騙して祝福を受ける。ヤマトタケルは叔母の衣裳を着て女装してクマソタケルを騙して殺す。

女装したり獣皮を被って相手を騙すことが、崇神、垂仁、景行とつづく実質的記録を持つ最初期の天皇家の人物やユダヤ人の神聖な始祖の行為に見られる。現代人の倫理では考えられない、古代人の智慧をその中に読み取る必要がある。「常陸国風土記」（『風土記』吉野裕訳、東洋文庫、1969年）の冒頭に、倭武天皇が東の国を巡察したとき井戸を掘らせると、流れ出る水が澄んで美しかった。天皇は清水で手を洗ったが、着物の袖が水に漬（ひた）ったので、漬ちの国（常陸国）と呼ぶようになった、とある（2頁および注7）。

ヤマトタケルは、クマソタケルやイヅモタケルあるいはワカタケルと同じように、天皇や地方の王の称号であったと考えられる。ヤマトタケルがイヅモタケルを討った話は次のようである。『古事記』によると、ヤマトタケルは木刀をおびてイヅモタケルを誘い、斐伊川（ひのかわ）で水浴する。ヤマトタケルは先に川から上がり、自分の木刀とイヅモタケルの真刀を取り換え、イヅモタケルが川から上ったとき、彼を討ち殺した。

木刀と真刀を取り換えて、相手を殺す話は『日本書紀』崇神天皇60年の条にも見られる。天皇は出雲の神宝を見たいと思い、人を遣わして差し出すよう命じた。神宝を管理していたイヅモノフルネはたまたま筑紫の国にいていた。そこで弟のイヒイリネが朝廷に差し出した。兄が帰ってきてこれを知り、弟を責めた。何年か経ってから、兄は弟を誘って淵で水浴した。兄はあらかじめつくっておいた木刀を弟の真刀と取り換え、勝負して弟を殺した。これを知った朝廷は、吉備津彦らを遣わしてイヅモノフルネを誅した。出雲の臣らは畏れて出雲大神を祭らないでいたが、のちに天皇は水底から出た鏡を祭らせた。

出雲大神はヤコブの子ヨセフを代表する大国主神のことである。日本列島に先に到来したヨセフ神話圏の権利を後来のヤコブ神話圏の崇神、垂仁、景行天皇の朝廷が収納した経緯が述べられたものである。神武天皇はハツクニシラススメラミコトといわれた。以後、欠史8代を経て崇神天皇に至り、再びハツクニシラススメラミコトを称する。始祖像が投影された「崇神天皇紀」に木刀と真刀を交換するモチーフが見られる。「常陸国風土記」に多出するヤマトタケル天皇は景行天皇の皇子ではなく、神話・伝説上の始祖天皇の投影

であるので、始祖ヤコブに見られた騙しのモチーフが日本神話の始祖伝承にも見られると考えられる。神武天皇伝説には謀略による敵対者の殺害譚として、エウカシが自分が仕掛けた罠に逆に追い込まれて殺される話や土蜘蛛ヤソタケル（とその一党）が、刀を隠し持った配膳人に切り殺される話がある。騙し討ちは智略であって悪徳ではなかった。

「創世記」はいう。ヤコブは兄エサウを騙して父イサクの祝福を受けたため、エサウの恨みを買った。母リベカはヤコブを自分の兄ラバンの許に避難させた。ヤコブはラバンの2人の娘と結婚し、生活も落ち着いたので生まれ故郷に帰りたかった。ラバンはヤコブに与えると約束したまだらの羊や山羊を全部、自分の息子たちにこっそり与えてしまった。しかし、ヤコブは神の恵みによって、まだらの羊と山羊を増やして豊かになり、男女の奴隷やラクダも持つようになった。ラバンの息子たちは、ヤコブが父の財産を全部奪ってしまったといい、迫害を始めた。ヤコブは2人の妻と子供たちと共に逃走することになった。ラバンはヤコブを追跡し、彼に追いついて契約を結んだ。ラバンは石塚と石碑をつくり、互いに侵入することがないよう誓った。(30. 25-31. 54)。

ここでは、ヤコブは難を逃れて頼っていった伯父であり義父となるラバンと騙し合う。また妻の義兄弟である従兄弟とも敵対し騙し合う関係になる。あるいはこれらの騙し合いは、始祖伝説に付随するトリックスターとしての始祖による通過儀礼であったのかも知れない。両者の間には判然とした価値観の違いが厳存し、それが双方それぞれにとって騙しと映ったと考えられるからである。双方の間に境界石を設定してそれを侵犯しないことを誓ったのはその解決策であった。ヤコブは自分が騙した兄エサウの許に帰り、許しを請おうと思い、贈り物を用意して道を急いだ。

「創世記」はいう。夜になってヤコブは2人の妻と2人の妾、11人の子供を連れてヤボクの渡しを渡らせ、自分はあとに残った。そのとき、何者かが夜明けまでヤコブと格闘した。その人はヤコブに勝てないと見て、ヤコブの腿の関節を打ったのでヤコブの腿の関節が外れてしまった。その人は「お前の名は何というのか」とヤコブに尋ねた。ヤコブが「ヤコブです」と答えると、その人は「お前の名はもうヤコブではなく、これからはイスラエルと称しなさい。お前は神人と戦って勝ったからだ」といってヤコブを祝福した。夜が明けるとヤコブは腰を痛めて足を引きずっていた。こういうわけで、イスラエルの人びとは、今でも腰の関節の上にある筋を食べない。かの人ヤコブの腰の筋を打ったからである(32. 23-33)。

ヤマトタケルは景行天皇の命を承けて東国征討に向かう。途中、伊勢神宮に叔母のヤマトヒメを訪ねる。タケルは、「天皇は私が死んでしまえばよいと思っていらっしゃるのでしょうか。西の方の悪人を討伐して帰還してからまだ間もないのに、東の方の悪人を征伐せよと派遣されます。やはり、天皇は私に死ねと思し召していらっしゃるのでしょうか」と嘆いて立ち去ろうとしたとき、ヤマトヒメはクサナギノ^{ツルギ}剣と袋を与え、火急のときはこの袋の口を開くようにいった。^{さがみのくに}相模国に入ったとき、^{くにのみやつこ}そこの国造に騙されて野原に入ったところ、火を放たれて焼き殺されそうになる。ヤマトタケルはヤマトヒメにもらった袋の口を開くと、中に火打ち石が入っていたので、剣で草を刈り、火をつけて向かい火をつく

り、国造らを皆殺しにした。

さらに東行し、走水海^{はしりみずのうみ}を渡ろうとしたとき、渡しの神が遮ったため、船を進めることができなかった。皇后のオトタチバナヒメの入水のおかげで海を渡ることができた。ヤマトタケルは都へ帰還する途中、白鹿に化けた足柄山^{あしがら}の坂の神を打ち殺した。尾張国に帰り、ミヤズヒメの家に入ったが、ご馳走を出すヒメの衣裳の裾に経血がついていた。2人は結婚し、ヤマトタケルはクサナギノ剣をミヤズヒメの許に置いて、伊吹山の神を討ちに出かけた。山の辺りで巨大な白い猪に逢った。ヤマトタケルは、この猪は山の神の使いだと考えたが実は山の神そのものであった。山の神は激しい雹^{たぎの}を降らせたのでヤマトタケルは意識を乱した。山から降りて正気を取り戻した。当芸野に着いたとき、歩きにくくなった。三重村に着いたとき、足が3重に腫れて疲れきった。能煩野^{のぼの}に着いて大和を偲ぶ歌を詠んでから、病が革まり死去した。

ヤコブは兄エサウに追われて母の兄ラバンを訪ねる。ヤマトタケルは叔母ヤマトヒメに父景行天皇によって死の世界に追いやられていると思うと語る。ヤコブもヤマトタケルも自分の故里ではなく異境で没する。ヤマトタケルには真刀と木刀のモチーフが見られるが、ヤマトヒメにももらったクサナギノ剣をミヤズヒメの許に置いたまま伊吹山の神と戦い、その靈氣^{あた}に中りやがて命を落とす。ヤマトタケルは走水海の渡しで神に遮られるが、オトタチバナヒメの入水で海峡を渡ることができた。ヤコブはヤボクの渡しで神人に阻まれ、結局は腰の筋をつままれて、生涯足を引きずった。ヤマトタケルは海峡を渡ったあと、足柄山の神の化身を打ち殺した。伊吹山の神の靈氣に中ったヤマトタケルの足は3重に腫れ上がって歩行困難になった。

ヤコブやヤマトタケルの跛行は何を意味するのであろうか。オイディプスは誕生したとき、古い師がこの皇子は父を殺すと予言したので、片足の筋を切って捨て子にされた。ユダヤ教は中国河南省開封に伝わり、ことに14世紀から17世紀の間、挑筋教という名で中国人にも信仰され、シナゴーク（ユダヤ教会堂）も建てられていた（現在はユダヤ教徒はいない。当時の教徒の子孫を称する中国人はいるが、関係文書などは博物館に展示されている）。

諸橋徹次『大漢和辞典』（大修館）によると、後漢の明帝の時代に中国に入ったという。挑筋とは割礼のこととある。ヤコブ伝説に従えば、腰の筋を抉り出す意味が本来の意味である。白川静『字統』（平凡社）の「挑」の項、同『字通』（平凡社）の「挑」の項でも、挑筋を割礼、割勢としているが、往時の中国人信徒が名付けた意味を正しく伝えていない。『辞源』（4冊本、修訂本、商務印書館）の「挑」の項には「挑筋（教）」は収録されていない。

片目、片腕（どちらかの腕の萎え）、片足（跛など）の起源については多く論じられてきた。全国の神社の境内の池に片目の魚がいるという伝承がある。古くは神主は毎年殺される習慣があり、予定された神主は片目にして目印にしていた。片目の魚も、神に供物として捧げるもので、一般の者が取ってはいけないものであった。神が片目であるという伝承は、神に捧げられる神主を片目にしたことからの連想ではないかと考える。目をつぶす

ために用いたゴマの枯れ莖、クリの^{いが}毬、松葉などはこのことに関連してタブー視された(『一目小僧その他』『定本 柳田国男集』筑摩書房、所収)。日本の鍛冶屋の守護神は目一箇神^{メヒトツガミ}という。たたら師は片目を使って炉穴から火加減を見るうちに、火の粉で目を傷めるし、片方の足と腕のみを使うことで他方の足と腕は萎えてゆく(谷川健一『青銅の神の足跡』『鍛冶屋の母』<『谷川健一著作集』5, 三一書房、所収>)。

片目は本来供犠する魚や神主の目印であったかも知れない。片足や足萎えは、大切な犠牲者が逃亡しないためであったかも知れない。さらに古くは別の意味を持っていたのではなからうか。J. デュメジル『ミトラ=ヴァルナ』(中村忠雄訳)第9章「隻眼と隻腕」にいう。ゲルマン神話の主神オージン(オーディン)は片目であった。彼のもう1つの目はミーミルの泉の底にあった。あるとき、オージンがミーミルの泉にやってきて1口飲ませてくれと頼んだ。しかし彼は自分の片目を担保とするまで、その許しを得ることができなかった。フィデス女神の信仰では、右手を覆い隠す慣習があった。信者は手を象徴的に女神に捧げることを意味した。右手を焼く毀傷行為もあった。これらの行為も神に自らを捧げる意味を持っていた(『デュメジル・コレクション』I, 丸山静, 前田耕作 編, 筑摩書房, 2001年, 所収)。

毎年1回、選ばれた人や生き物が神に供犠された。それは宇宙の運行と同調すると考えられた神が最も衰弱したとき、その神の他我と考えられる人物や生き物を供犠して神を活性化する意味を持っていた。毎年特定の祭司を殺すのは、祭司が持つ若いエネルギーを死にそうになった神に注入し、神を若返らせることを意味した。魚は古くは神の他我と考えられたので、同じような処置をしたのである。オーディンは常に若いエネルギーを持つようにと願望され、片目で表現されたのであろう。片腕を焼くのも同じ意味を持っていた。単なる供犠のためではなく、神の腕力、臂力の回復の意味があった。

若いクマソタケルの弟が殺される直前に始祖王であるヤマトタケルに新しい名を献上したのも同じ意味を持っていた。尻から剣を刺されたのは、供犠される人や動物が後足からさか剥ぎにされ、真皮を開いて腰の筋をもぎ切られた名残りである。ヤコブの場合、ヤボクの渡しで自らは腰の筋を神人に献上し、その代償として神人からイスラエルの名をもらってユダヤ人の始祖となった。2人とも足腰の力を放出したため、終生跛行した。オイディプス王は跛行するだけでなく、晩年は自分の母と結婚し、子を儲けたことが発覚し、自ら目を突いて盲目となる。盲目のモチーは晩年のイサクにも用いられる。ヤコブは獣皮を被り、父イサクを騙して祝福を受け、長子権を手に入れる。王位と王国と王妃を手に入れたオイディプスは、跛行するばかりか盲目になる。

中国夏王朝の始祖となった禹は、治水のため全国を歩いたため、禹歩といわれる跛行をするようになる。白川『字統』によると、禹の字形は2匹の虫を上下に組み合わせたもので、上は雌の竜、下は雄の竜である。禹の父は^{フン}鯀で、禹自身も偏枯という魚であるという。西安半坡遺跡出土の魚形彩文土器から推測されるのは、古代の地中海、西アジアの魚神崇拜、アクレサンダー大王物語の地下の緑の人ヒズルと生命の水に漬けると生きた魚になる乾し魚の話、片目の魚と古い文化には関連が見て取れるということである。

魚は海のものであれ内陸のものであれ、牧畜が発達する以前は、蛙と共に重要な蛋白源であった。アレクサンダー大王物語では、ヒズルは乾し魚を袋に入れて腰からぶら下げていた。ギリシア語では魚はイクテュース (IXTUS) といった。偶然、この話はイエス (I)・キリスト (X)・神の (T)・息子 (U)・救世主 (S) を表わすギリシア語の頭文字であることが知られた。そこで洞穴の最奥部に描かれた魚の絵、あるいは魚の岩刻画はギリシア時代以前のものであっても、何か神秘的な感情を喚起した。

上来述べてきたように、原ヤコブ伝説は、「創世記」には無駄のない語り口で話が展開するが、日本神話では幾つかの枝に分かれて語られる。ヤコブが獣皮を着てエサウに扮し父イサクの祝福を受けた話は、ヤマトタケルがヤマトヒメにもらった衣装で女装し、クマソタケルを殺す話になるが、彼の死の直前、ヤマトタケルの新しい名を奉られている。ここではヤマトタケルは相手の毒氣に中ることはなく、跋行することはない。ミヤズヒメはヤマトタケルと結婚する。ヒメの衣裳の裾には経血が着いていた。琉球の男子は、近親の女子の経血の着いた布をもらい出征した。それを妹^{いも}の力として肌身離さず大切に時代があった。ヤマトタケルはこの衣装で女装したとは伝えられていない。真刀を妻の許に置いて伊吹山に出かけ山の神の毒氣に中たり、跋行してやがて死去することになる。

「創世記」はいう。ヤコブの母リベカは、エサウの妻たちのことで生きているのが嫌になった。カナン^{カナン}のヘテ(ヒッタイト)人の娘から妻を娶らないようにとヤコブにいった(27. 46)。父のイサクはヤコブにカナン^{カナン}の娘から妻を娶ってはならない。リベカの兄ラバンの住むパダン・アラムにゆき、そこの娘を娶るように命じた。ヤコブはイサクに送り出され、ラバンの所へ向かった(28. 1-5)。ヤコブは出立したが、途中で日が沈んだのでそこで1夜を過ごすことにした。ヤコブはその場所にあった石を取って枕とし、そこに横たわった、彼は夢を見た。天から地上に向かって階段が伸び、天使たちが上がったたり下りたりしていた。傍らに主が立っていて次のようにいった(28. 10-13)。

「私は汝の父アブラハムの神、イサクの神なる主である。汝が今横たわっているその土地を汝と汝の子孫に与えよう。汝の子孫は大地の塵のように増えて西へ東へ北へ南へ広がるだろう。地上の民は全て汝と汝の子孫によって祝福されるだろう。私は汝と共にあり、汝のゆく所がどこであっても汝を守り、この地に連れ戻すであろう。私はいったことを果たすまで、汝を見捨てることはない」。ヤコブは夢から覚めて、「ここは神の家だ。ここは天の門だ」といった。翌朝、ヤコブは枕にした石を立て、その上に油を注ぎ、その場所をベテル(神の家)と名付けた(28. 13-19)。

ヤコブの母リベカは長男エサウが2人の土地の娘を娶ったのに不満を持った。そこで、エサウが弟ヤコブを迫害するのを守るため、パダン・アラム(ハランの一带)にいる自分の兄の許にヤコブを送り、その土地の娘と結婚するようにさせた。天照大神は地上にアメノオシホミミノミコトを遣わす予定をしていたが、オシホミミにニニギノミコトが生まれたので、天孫ニニギをマトコオフス^ママにくるんで地上に送った。この天孫降臨神話では、ニニギは赤子として地上に降り立つが、笠^{かさ}紗の岬でコノハナサクヤヒメと逢い、結婚することになる(後述)。ニニギも異界の娘を娶る。ニニギもアメノオシホミミの久し振りの

子で、その兄にはホアカリノミコトがいた。ホアカリは体の赤いエサウに対応するが、ここでは表舞台に現れない。ニニギはホノニニギといい穀霊であった。ヤコブはリベカの結婚後20年目に生まれた双子の弟であった(5, 20-26)。ヤコブは農業に従事し、エサウに対応するホアカリは、海と山の漁撈や狩猟に従事する海幸彦、山幸彦の分身であった。ヤコブが20年目に生まれたという伝承は、皇祖神と穀神トヨウケノオホカミを祭る伊勢神宮の式年遷宮が20年目ごとに行われることと関係がある。遷宮は初めは19年目ごとに行われた。19年はメトン周期といわれ、宇宙の更新する年数で、旧暦の基本であった。19年も20年も西方渡来思想であった。

天孫ニニギはマトコオフスマにくるまれて降臨した。このフスマは本来は木綿製の寝具ではなかった。江上波夫が指摘したようにフェルト製のものが永い間使用されたと思われる。マトコオフスマは羊膜の表象であるという説もある。いずれも新生児の誕生を物語る。さらに古くは、儀礼で用いられたフスマは、羊皮紙の材料になる、毛を取りはらった小羊の腹の皮ではなく、羊毛のついた剥いだばかりの生毛皮であった。ヤコブが兄エサウであると称して、光を失った父イサクを騙して祝福を受けたとき、エサウの晴れ着を着て手や首に小山羊の毛皮を巻きつけて父に触われた。(27, 15-17)。晴れ着というのは、通過儀礼のような晴れ場で着る衣服で、日本の紋付きのような、植物あるいは動物のトーマムの象徴を付けた礼服であったと思う。

ヤコブは野宿して夢で天から地に至る階段(梯子)を神の使いたちが上下するのを見た。日本神話では、天孫ニニギの降臨の前、天照大神は息子のアメノオシホミミに命じて、地上に降りて葦原中国^{アシハラノナカツクニ}を平定させようとした。アメノオシホミミは天の浮き橋の上に立って中つ国を見下したところ、ひどく乱れているのでその旨、大神に報告した。神々の相談の結果、結婚した妻との間に儲けたニニギを降ろすことにした。その間、神々が浮き橋を上下している。

アメノオシホミミは高木神の娘ヨロヅハタトヨアキツシヒメとの間にアメノホアカリとニニギの双子を儲けた。ホアカリとニニギはエサウとヤコブに対応する。ニニギは下降する途中、サルタヒコノカミに出迎えられる。サルタヒコは『日本書紀』によれば、赤いホウズキのように照り輝いていたという。天孫降臨のとき、ニニギに随伴したアメノウズメがサルタヒコと対面して気おくれしなかった。

ヤコブはパダン・アラムのラバンのもとから逃走し、カナンに向かった。ヤボクの渡りで神と闘ったあと、見るとエサウが400人の者を連れてやって来るのが見えた。ヤコブは2人の妾とその子供たちを先頭に、妻レアとその子供たちをそのあとに、妻ラケルと子供ヨセフを最後に置いた。ヤコブは先頭を進み、兄の許に着くまでに7度地にひれ伏した。エサウは走ってきてヤコブを抱き、2人は共に泣いた。妾たちは子供たちと進み出てひれ伏した。妻のレアとラケルも子供たちとひれ伏した。(33, 1-20)。赤いエサウは赤い異相のサルタヒコと対応する(第33章)。エサウはサルタヒコと同じようにヤコブ(ニニギ)を先導する。面勝つ^{おもつか}アメノウズメは、ヤコブに随伴した目の輝いた妻ラケルに対応する。

ヤコブが夢の中で天地をつなぐ階段を天使が上り下りしているのを見たとき、傍らに主

が立っていてヤコブを祝福した。天孫ニニギが中つ国に降臨するとき、天照大神は天壤無窮の神勅を下している。「豊穰な葦原の瑞穂の国は、わが子孫が王となる地である。皇孫である汝が行って治めよ。皇位が栄え続くのは、まさに天と地が永遠に続くように窮まることのないであろう」。

天壤無窮の神勅は戦前の小学生は暗誦することができた。『日本書紀』上（日本古典文学大系 67, 岩波書店）神代下, 第9段, 1書第1（147頁）の補注2-20（571-2頁）に諸家の学説を挙げる。この神勅は壮麗な漢文体であるが、これに対応する8世紀以前ばかりか8世紀以後の漢文もないようである。原ヤコブ伝の伝承は中国には定着せず、8世紀以前の日本に定着した。戦後直後のいわゆる科学的歴史研究がこの問題をタブー視した観がある。皇国史観の1つで、諸悪の根源であると主張する者もいた。

ヤコブは翌朝目が覚めて、ここは神の家だ、天の門だといって石の柱を立て、神の家とした。ニニギは筑紫の日向の高千穂のクシフル峯に降臨した。ニニギは、この地が朝鮮に向いており、笠沙の岬にまっ直ぐに道が通じているので良い土地だといって、地底深い岩盤に太い宮柱を立て、高天原に向かって千木を高々とかけ、そこを住居とした。柱は別稿で述べたように、祖先が地上に湧出した表象であり、神そのものと考えられた。ヤコブは石の柱に油を注いだとある。古くは年に1度、石あるいは木の柱に、供犠した動物の毛皮を被せた。柱は血と膏でべとべとになった。季節の変わり目に衰弱した神が、自分の他我である供犠動物のエネルギーを与えられ、さらに1年元気に過ごすことができるとされた。ニニギはそこに宮殿を建てた。その土地は日本に於ける朝鮮との境いと認識された。それは神の家であり天の門であった。原ヤコブ伝の保持者は朝鮮経由で九州に渡来した。

ヤコブは神の家（天の門）からラバンの住む土地に進んでいった。途中に井戸があり、その口に大きな石が載せてあった。何人かの羊の群れが集まるのを待って、羊に水を飲ませる決まりになっていた。人びとはラバンの娘ラケルが羊の群れを連れてくるのを待っていた。やがてラケルが現れたので、ヤコブは井戸の石を動かして羊に水を飲ませ、自分の素姓を名乗り、ラケルと抱き合って泣いた。ラケルはヤコブを父ラバンの家に連れていった（29. 1-14）。

ラバンには2人の娘があった。姉はレア、妹はラケルといった。姉は目の輝きがなく、妹は美しかった。ヤコブはラケルを愛したので、7年間無償で働くのでラケルと結婚させて欲しいとラバンにいった。7年経ってラバンは娘のレアをヤコブの所に連れていった。ヤコブは彼女の所に入った。翌朝、それがラケルでなく、レアであることが分かった。1週間つづいた婚礼の祝宴のあと、ラバンはラケルもヤコブに与えた。ヤコブはそこで更に7年間ラバンの所で働いた（29. 16-30）。7年間の年期のあと嫁をもらうのは年期掙の1つである。ヤコブがレアとの初夜で見抜けなかったのは、初夜の契りが、現在でも世界の各地で見られるように、暗黒と沈黙のうちに行われたからである。

ニニギは笠沙の岬で美しい女子と逢った。オホヤマツミノカミの娘コノハナサクヤヒメであった。ニニギはコノハナサクヤヒメに求婚したがオホヤマツミは醜い姉のイハナガヒメを副えて差し出した。ニニギはその醜さを畏怖して送り返し、コノハナサクヤヒメと一

夜婚を行った。父オホヤマツミはイハナガヒメを送り返されいたく恥じ、次のように申し送った。「イハナガヒメをお使いになれば、天つ神の御子のご寿命は石のように永遠に変わることなく、コノハナサクヤヒメをお使いになれば、木の花が栄えるようにお栄えになると誓願して奉りました。イワナガヒメを送り返され、コノハナサクヤヒメをお留めになったので、天つ神の御子のご寿命は木の花のようににはかないものとなるでしょう」。

それから日時が経ってサクヤヒメがニニギの前に参上し、「私は妊娠しました。天つ神の御子は自分勝手にお生みすることはできませんので申し上げます」といった。ニニギは「サクヤヒメはたった1夜の契りで妊娠したというが、これは私の子ではなく国つ神の子だろう」といった。そこでサクヤヒメは戸口のない大きな産屋を建て、「もし国つ神の子であるならば、子は無事に生まれまいでしょう。天つ神の御子なら無事に生まれるでしょう」といって産屋の中に入り、土で塗り固めて火を放ち出産した。生まれた子の名前は、ホデリ、ホスセリ、ホヲリの3柱の神である。ホデリは海幸彦でホヲリは山幸彦のことである。

山幸は兄の釣り針を失ったので、それを探しに海神宮に向かう。海神宮の門の傍らに泉があり、そのそばに桂の木があった。山幸が桂の木に登って座っていると、海神の娘のトヨタマヒメ（妹にタマヨリヒメがいる）の侍女が水汲みにきて、泉の水面に映った貴公子の姿を見た。水を所望されたので、器に水を入れて差し出した。山幸は首飾りの玉の緒を解いて玉を口の中に入れ器の中に吐き出した。玉は器にくっついて離れなかったが、侍女は器をトヨタマヒメに差し出した。事情を聞いたトヨタマヒメが外に出て見ると美男子がいた。一と目惚れして父に知らせると、父は宮殿に招き入れ、娘と結婚させた。

山幸（ホヲリノミコト）は海神宮にいること3年、ある日深いため息をついたことが海神に知られ、失った釣り針を求めてやってきたことを告げた。海神が魚たちを集めて尋ねると、タイが喉に骨をつまらせて困っていると答えた。早速タイを呼んで針を取り出し、山幸に献上した。海神は、この針を兄海幸に返すときは、この針は心のふさがる針、心のたけり狂う針、貧乏になる針、愚かになる針といって後ろ手にして渡すようにといった。さらに潮満珠と潮干珠しおみつたま しおふるたまを与え、兄を操縦するようにといった。海神は山幸をワニに乗せて送り返した。山幸は兄の海幸に釣り針を返したところ、兄はだんだん貧しく、気が荒くなり、愚かになっていった。兄が攻めてくるときは潮満珠を出して溺れさせ、命請いをすれば潮干珠を出して救ってやった。兄の海幸は弟の山幸に、昼夜の別なく汝の守り人となってお仕えするといっ、その子孫である隼人は海に溺れたときの種々くさぐさの仕草を演じて宮廷に仕えている。

ヤコブ、ニニギ、山幸はいずれも水辺で女性に逢い結婚する。ヤコブと山幸はことに井戸（泉）の傍らである。水辺はあちらがわの境いになる場所で、異境の女性との結婚の前提となる場所であった。相手の女性は2人であった。前2者の場合、姉妹は美醜を代表した。山幸の妻トヨタマは地上に帰った夫を追って、やってきた浜で出産するが、夫が禁忌を破ったといっ海神宮に去るが、妹のタマヨリを自分の代わりに地上に送り、子を養育させる。子は成長して叔母タマヨリと結婚し、儲けた子が神武天皇となる。ニニギとその

子山幸の場合は、ヤコブ伝のモチーフがさらに延伸して始祖誕生へとつながる。

イハナガヒメの不死とコノハナサクヤヒメの死の起源は、大林太良によると、インドネシアのスラウェシ島に伝わる民話にその典型が見られる。神は人間に不死を与えようとして石を与えるが、人間は食べられないといって拒否し、バナナを選んだので不死でいられなくなった（『日本神話の起源』徳間書店、1990年）。人間がもしカニや蛇の皮を食べたら不死を得たのに、バナナを食べたので不死が得られなかったというベトナムやインドネシアのニアス島に伝わる民話や、メラネシアのニュー・ブリテンに伝わる似た民話もある（J・G・フレイザー『金枝篇』ザ・スケープゴウト、1913年）。

大林はこの型の話をバナナ型といい、東南アジアが起源で日本にも伝播したという。原ヤコブ伝は、述べてきたように多くの要素やモチーフが複合して形成され、その複合が北アジアを経て日本に到来した。大林のいうバナナ型のモチーフは単体で、原ヤコブ伝が日本に到来した以前の基層にあったかも知れない。姉妹のモチーフや美醜のモチーフは原ヤコブ伝の複合として入ってきた。学界では浩瀚な松村武雄『日本神話の研究』（第3巻、培風館、1955年）、松本信廣『日本民族文化の起源』（1、神話・伝説、講談社、1978年）、『三品彰英論文集』（第1巻～第6巻、平凡社、1970年－1974年、ことに第1巻『日本神話論』、第2巻『建国神話の諸問題』）がこの問題を扱っているが、ヤコブに言及したものがない。別所梅之助『聖書民俗考』（有明書房、1975年（1933年））は、ヤコブ伝と大国主神伝の一致に触れている。

新羅の景文大王は18歳で花郎（新羅の武士）となった。20歳に達したとき憲安大王に呼ばれて王に認められ、王の2人の娘を娶よう求められた。2人の王女のうち、姉は醜く妹は美しくかった。若者が父母に相談すると、父母は妹を娶よう勧めた。花郎の仲間の長は姉を娶よう勧めた。若者はその意見に従い姉を娶った。その後3か月して王は病いが重くなり、群臣を集めて自分には息子がいないので、長女の夫が王となるよう遺言した。王の死語、王位についた若者は、妹の方も妃にすることができた。

景文大王が寝るときは、いつも蛇が舌を出して王の胸の上を覆った。王が即位すると、王の耳が急に長くなってロバの耳のようになった。王の帽子職人だけがこのことを知っていた。誰にもこの秘密を漏らさなかったが、死ぬまぎわ、道林寺の竹に向かって「王様の耳はロバのようだ」と叫んだ。するとその後、風が吹くたびに、竹が「王様の耳はロバのようだ」と音を立てた。王がこれを憎み、竹を伐ってそこにワカハジカミを植えた。こんどは風が吹いても「王の耳は長い」というのみであった（一然『三国遺事』金思輝訳、朝日新聞社、1976年、153－5頁）。

『プルターク英雄伝』（九、河野与一訳、岩波文庫、1956年）にいう。アレクサンダー大王の母オリュンピアスはマケドニアの王フィリッポスと結婚した。オリュンピアスは結婚式の前夜、雷が自分の腹に落ち、そこから火が燃え上がり、やがて炎となってあたりに広がってから消えたという夢を見た。あるとき、フィリッポスはオリュンピアスが眠っている傍らに蛇が横たわっているのを見た。フィリッポスは蛇はエジプトの神アンモンの化身であると知り、妻に近寄らなくなった。フィリッポスは蛇が妻の傍で寝ているのを扉の

透き間から見たが、そのとき、片目を^{さる}樞に打ちつけて失明したといわれている。アレクサンダーは、小アジアのエベソスにあるアルテミス女神の神殿が焼けた1月6日に誕生した（「アレクサンドロス」2-3）。

アレクサンダー大王は、当時の思想では、巫女と神との聖婚によって生まれたとされた。父フィリッポスに片目の伝承があるのは、フィリッポスに神性を与えるためであった。アレクサンダーは火の中で誕生する伝承を持っていた。このモチーフは、コノハナサクヤヒメが産屋に火を放って海幸彦、山幸彦を生んだ伝承の中にも見られる。1月6日はイエス、ゾロアスターらの誕生日で、この日は十日正月の後半の始めの日で、5日間の死の儀礼のあとの蘇りの儀礼の最初の日であった。十二日正月の場合は、1月7日の^{じんじつ}人日がこれに相当した。1月7日は十四日正月の前半の死の儀礼の最後の日でもあった。

プリュギア（トルコの中央部）のミダース王は、パーン神とアポロン神が音楽の競技をしたとき審判をしたが、パーンに軍配を上げたのでアポロンは怒り、王の耳を愚か者の耳だといって、ロバの耳に変えた。王はプリュギア帽の下にこれを隠していたが、床屋だけはこれを知っていた。床屋は地に穴を掘り王の秘密を話し土をかけておいた。そこに葎が生え、風が吹くと「王様の耳はロバの耳」と囁いた（W.スミス『ギリシア・ローマ古典辞典』ロンドン、1925年〈1848年〉）。

ミダース王は、手に触れるものが全て金になるよう望んだところ、望みがかなったのはよいが、食べ物全て金に変わり飢えた。そこで川で禊ぎをしてもとの状態に戻した。ミダース王は、あらゆるものを豊かに産出したプリュギアの王で、王がこの国で行った儀礼の名残りが神話として伝えられたのであろう。古典時代の黄金と大理石の産地であったプリュギアで、黄金に取り囲まれる儀礼があったと考えられる。王家のトーテム獣はロバであった。ロバは愚かであったり従順であったりする属性を持つが、それとは関係なく祖先獣は設定されたようである。

アブレウス『黄金のろば』（上巻、呉茂一訳、下巻、呉茂一・国原吉之助訳、岩波文庫、1956-7年）は楽しい読み物として西欧で読み継がれてきたが、1566年に英国で『黄金のろば』としてアドリントンによって英訳されて出版されて以来、「黄金の」という形容詞がつくようになった。「黄金の」というのは「素晴らしく面白く美しい」という意味でつけたらしい（上巻、209-10頁）。ルキウスはミロオの妻が幻術でフクロウに化したのをまねて自らはロバになる。ロバのルキウスは多くの苦難を乗り越え、イーシス女神の祭りに参加し人間に生まれ変わる。ルキウスはイーシスの信徒に加えられ、ローマで浄福の生活を送る。

巻の11で、イーシスの来迎を迎える祭りの行列は黄金の鈴、黄金の灯明台、黄金の盃、黒と黄金の2色に色分けされた顔を持つアヌービス、黄金の壺などで全体が黄金色で彩られていた。その中でルキウスのロバの顔はすべり落ち、たて髪も消え失せ、毛肌は和らぎ、でっかい胴体は細くなり、蹄は爪と変わり、長い顎も縮まり顔も頭も丸くなり、大きな耳ももとのように小さくなり、石みたいな歯も人間の歯になり、尻尾もすっかり消えてしまった（前掲書、下巻、142-72頁）。ルキウスがロバから人間の姿に戻ったのは、黄金で

荘厳されたイーシス女神の祭りのさなかであった。ルキウスの被ったロバの毛皮は破棄される穢れであったが、脱皮が始まる直前には、他のロバと識別するために金泥あるいは金粉で全身が塗布されていたであろう。すべてが笛の音と共に進行した（景文大王やミダース王の伝説では竹や葦が風が吹くたびに王の秘密を語った）。

『黄金のろば』の標題は、写本で伝わる間も、口頭では「黄金のロバ」として流布していたに違いない。「黄金の」というのは、「金色の」という意味で、「とても面白い」といった類のものではなかったと思う。本題は『変身物語』で、古代の再生儀礼を物語にしたものである。著者アプレイウスは2世紀前半カルタゴに生まれ、成人してから小アジア地方に趣き、プリュギアを訪れている。さらにギリシア本土に渡り、イーシス女神の信仰に入った（前掲書、上巻、202-3頁）。アプレイウスはプリュギアにおいて行われたイーシスとオシーリスの再生儀礼やエジプトにおけるイーシス女神の儀礼を始め、4世紀にローマのキリスト教が国教化される前のイーシス・マリア女神の再生儀礼を体験したであろう。

プリュギアのミダース王の神話では、王の耳はロバの耳であったと伝えられた。王は儀礼のとき、ロバの毛皮を被り、葦笛の音で再生したと考えられる。再生儀礼は毎年、季節の変わり目に行われた。儀礼では音楽の競技が行われた。黄金の褒美が用意され、行列は黄金色で輝いた。王は黄金のロバの毛皮を脱いで新しく生まれ変わった。新羅の景文大王の3つの伝説のうち、第1の姉と妹と結婚する話はヤコブ伝説圏のものであるが、第2のものはアレクサンダー・ロマンスのもので、第3のものも第2のものと一緒に東方に伝わったものと考えられる。ヤコブ伝説の1部もアレクサンダー・ロマンスと共に伝播したと考えられうる。

ヤコブが伯父のラバンの許から逃走し、ベテルに帰ってきたとき、神が再びヤコブに現れてヤコブを祝福した。神はヤコブに対して、汝はもはやヤコブではない。汝の名はイスラエルであるといった。また「私は全能の神（シャッドイ）である。産めよ、増えよ。汝から多くの国民の群れが起こり、汝の腰から王たちが出る、私はアブラハムとイサクに与えた土地を汝に与える。また汝に続く子孫にこの土地を与える」と神はヤコブにいい、天に昇っていった。ヤコブはその場所に石の柱を立て、その上にブドウ酒と油を注ぎ、その場所をベテル（神の家）と名付けた（35. 9-15）。

ヤコブは15年前に同じベテルを発ってパダン・アラムの伯父の家に行き、また同じベテルに帰還した。ヤコブは神ではないが、神に準ずる始祖で、神の家から旅に出て、お旅所に相当する異域であるパダン・アラムの伯父ラバンの家に留まり、妻子を連れて神の家に帰還する。神はヤコブの出発前に与えた神勅とは別の神勅を与えて去る。神が神の家でヤコブに与えた2つの神勅は、日本神話の天壤無窮の神勅に相当する。これらの神勅は、原ヤコブ伝から双方に伝わったと考えられる。ヤコブはイスラエルの名をヤボクの渡して神人と闘って与えられたと伝えられる一方、パダン・アラムからベテルに帰還したとき神から与えられたとも伝えられる。

ヤマトタケルノミコトの名はクマソタケルの弟が殺害される直前にヲウスノミコトに奉った名である。前述したように、ヤマトタケルは個人の名ではなく、始祖王としての集合

体の名である。原ヤコブ伝のヤコブは、日本神話では、一方では天照大神、ニニギ、神勅、コノハナサクヤヒメ、イハナガヒメの神話として展開し、他方ではヤマトタケル伝説として展開する。景文大王（在位 861-875）と 4 世紀後半と考えられる景行天皇の間には 500 年の隔りがある。さらに天孫ニニギと景行天皇、ヤマトタケル伝説成立には何波にもわたる原ヤコブ伝の到来が考えられる。ヤコブは神の家で天の梯子を上下する天の使いを夢見る。また神が現れて神勅を与えられる。神の家はベテルすなわち「ベート・エール」のことで、神をヤハウエと呼ばないでエールと呼ぶ集団が伝える文書にヤコブ伝は属する。

宗教史的に見れば、神の家はこの集団（エロヒスト）が聖地とする以前から聖地であった。この集団によってヤコブ伝が「創世記」の中に取り入れられたのは前 8 世紀のこととされる。原ヤコブ伝は西暦紀元以後も存続し、そのモチーフは東西に伝播した。一方、ユダヤ教徒自体も東方に伝道した。シルクロードの長安、洛陽を経て、さらに進んだ地にある開封の挑筋教がそれであるが、現在はその痕跡があるのみである。天孫降臨、神勅、ヤマトタケル伝あるいは新羅の景文大王伝に見られる「創世記」のヤコブ伝のモチーフとの一致は、ユダヤ教あるいはユダヤ教徒あるいはキリスト教徒の渡来の結果というよりは、原ヤコブ伝のモチーフの到来の結果と見る方が当たっているかも知れない。後世の研究家が解明するであろう。

内田樹^{たつる}『私家版・ユダヤ文化論』（文春新書、2006 年）第 2 章「日本人とユダヤ人」に^{にちゆ}日猶同祖論の項がある。『エンサイクロペディア・ジュダイカ』（マクミラン）全 16 巻、23000 頁のうち、日本の項は 2 頁に過ぎない。それによると、日本は 19 世紀半ばまで、ユダヤ人にその存在が知られていない土地であった。日本人とユダヤ人が同祖であるといひ出したのは、ユダヤ人ではなく、スコットランド人マクレオドであった。彼の『日本古代史の縮図』（長崎、1875 年、なお本書は高橋良典編著『日本とユダヤ 謎の三千年史』自由国民社、1987 年として訳出されている）は日本人は古代イスラエル人の子孫であり、天皇家の歴史は古代イスラエル王家の歴史を継承している、と述べる。本書は新しいヒントを読者に投げかけるが、ヤコブ伝と日本神話に触れることはなかった。日本人の祖先はユダヤ人であるという日猶同祖論はやがて^{なかだじゅうじ}中田 重 治（1870-1939）、^{さへきよしろう}佐伯好郎（1871-1965）、^{こやべ}小谷部全一郎（1867-1941）らによって特異な純化を遂げてゆく。内田は彼らの論考を妄想、奇想天外、奔放、奇矯、皇国主義的イデオロギーなどの語を鏤めて論評する。この 3 人は明治初期に育ち、アメリカで教育を受け、キリスト教について深い知識を有していた（内田、前掲書、60-73 頁）。これら 3 人の著作もマクレオドの著作と同じに、大いに後進を裨益するところがあり、単に妄想と断じ去ることはできない。ただ惜しむらくは、ヤコブ伝に触れることがなかった。

(2006. 12. 14 受理)